

2016 年度 研究所事業報告書

研究所名	人間科学研究所
研究所長名	松原 洋子

I. 研究成果の概要

本欄には、研究所・センターの実施した研究の成果について、その具体的内容、意義、重要性等を、研究所総合計画(5 ヵ年)および 2016 年度重点プロジェクト申請調書に記載した内容に照らし、項目立てなどをおこなうことができるだけわかりやすく記述してください。

1. 重点プロジェクトの推進

3つの重点プロジェクトそれぞれに、発展的な成果がみられた。「法と対人援助」プロジェクトでは、サブ・グループが中心となり R-GIRO 第3期拠点形成型研究プロジェクト「修復的司法観による少子高齢化社会に寄り添う法・社会システムの再構築」として申請し採択されたこともあり、同 R-GIRO プロジェクトと緊密な連携を取りつつ研究を推進した。また、「対人援助の人間科学（基礎研究）」「対人援助の人間科学（応用研究）」両プロジェクトを横断して形成されたグループが、同じく R-GIRO 「学融的な人間科学の構築と科学的根拠に基づく対人援助の再編成」として採択され、こちらも若手研究者の雇用や研究ネットワーク形成など重点プロジェクトに関わる堅固な研究基盤を構築した。

2016年12月には、研究所と上記 R-GIRO2 拠点との共催で、研究所年次総会を兼ねた公開シンポジウム「対人援助の新展開：理論・方法・制度の視点から」を開催した。ポスターセッション含め、研究成果の報告の場となると同時に、専門研究員や大学院生等の若手研究者を含む研究所関係者と学外の研究者・実務家のネットワーク形成の場としても機能した。

2. 学術誌の刊行・メディア媒体を使用した発信

『立命館人間科学研究』第34号と第35号を刊行し、同時に全文を Web 公開した。掲載論文合計14本のうち、11本は外部査読者を含む2名以上の査読を経たものであり、12本の論文の筆頭著者は若手研究者であった。また研究成果の社会的発信を促進するため、日英両言語により、イベント案内や「人間科学のフロント」（研究紹介ページ）、ソーシャルメディア等 Web 上で積極的な情報発信を行った。逐次刊行物『インクルーシブ社会研究』は、シンポジウムを元にした論考または逐語録として若手研究者が中心に編纂を行い、第16号と第17号を刊行し、全文を Web 公開した。

3. 若手研究者の育成

研究所重点プログラムの資金を活用した競争的研究資金「萌芽的プロジェクト研究助成プログラム」は、今年度は若手研究者に絞って公募し、2件を採択した。また、プロジェクト室をはじめとする研究資源を若手研究者を中心に配分し、研究基盤の形成を大いに支援した。結果、他大学教員へ1名、本学専任教員へ1名、本学の任期付きポストへ7名の就職を実現させ、また専門研究員1名が JSPS 特別研究員 PD に採択、院生（JSPS 特別研究員）および専門研究員の計5名が学会賞を受賞するなど、目に見える成果も挙げる事ができた。

4. その他研究の展開

重点プロジェクト以外の研究プロジェクトもまた、意欲的な活動を行った。京都市ユースサービス協会とのユースワーカー養成に関わる共同研究の進展はその代表的な例である。また、介護殺人、高齢者運転事故、電子図書館など時事問題に絡んだ研究がメディア等から注目・引用・参照されたり、錯視や空間知覚の研究（色の恒常性・股のぞき）に代表される、認知心理分野に関わる地道な基礎研究の成果がイグ・ノーベル賞受賞をはじめとして社会から注目・評価されたことも特筆したい。

II. 拠点構成員の一覧

本欄には、2017年3月31日時点で各拠点にて所属が確認されている本学教員や若手研究者・非常勤講師・客員協力研究員等の構成員を全て記載してください。

※若手研究者とは、立命館大学に在籍する以下の職位の者と定義します。

①専門研究員・研究員、②補助研究員・RA、③学振特別研究員(PD・RPD)、④博士後期課程院生・一貫制博士課程3回生以上に在籍する院生

役割	氏名	所属	職位
研究所長・センター長	松原洋子	先端総合学術研究科	教授
運営委員	中村正	産業社会学部	教授
	松田亮三	産業社会学部	教授
	山本耕平	産業社会学部	教授
	石倉康次	産業社会学部	教授
	土田宣明	総合心理学部	教授
	谷晋二	総合心理学部	教授
	サトウタツヤ	総合心理学部	教授
	矢藤優子	総合心理学部	教授
	安田裕子	総合心理学部	准教授
	若林宏輔	総合心理学部	准教授
	村本邦子	応用人間科学研究科	教授
	増田梨花	応用人間科学研究科	教授
	美馬達哉	先端総合学術研究科	教授
	井上彰	先端総合学術研究科	准教授
	浅田和茂	法務研究科	教授
稲葉光行	政策科学部	教授	
学内教員 (専任教員、研究系教員等)	竹内謙彰	産業社会学部	教授
	野田正人	産業社会学部	教授
	小澤亘	産業社会学部	教授
	津止正敏	産業社会学部	教授
	櫻谷真理子	産業社会学部	教授
	大谷いづみ	産業社会学部	教授
	斎藤真緒	産業社会学部	准教授
	岡本尚子	産業社会学部	准教授
	春日井敏之	文学部	教授
	東山篤規	文学部	教授
	湯浅俊彦	文学部	教授
	常世田良	文学部	教授
	北出慶子	文学部	准教授
	星野祐司	総合心理学部	教授
	八木保樹	総合心理学部	教授
	服部雅史	総合心理学部	教授
	北岡明佳	総合心理学部	教授
	廣井亮一	総合心理学部	教授
山本博樹	総合心理学部	教授	

	宇都宮博	総合心理学部	教授	
	岡本直子	総合心理学部	教授	
	中鹿直樹	総合心理学部	准教授	
	林勇吾	総合心理学部	准教授	
	三田村仰	総合心理学部	准教授	
	荒木穂積	応用人間科学研究科	教授	
	吉沅洪	応用人間科学研究科	教授	
	団士郎	応用人間科学研究科	教授	
	小泉義之	先端総合学術研究科	教授	
	立岩真也	先端総合学術研究科	教授	
	松本克美	法務研究科	教授	
	森久智江	法学部	准教授	
	斎藤進也	映像学部	准教授	
	山浦一保	スポーツ健康科学部	准教授	
	朝野浩	教職教育推進機構	教授	
	藤本学	教育開発推進機構	准教授	
	堀江未来	国際教育推進機構	准教授	
	山口洋典	共通教育推進機構	准教授	
	早川岳人	衣笠総合研究機構	教授	
	開沼博	衣笠総合研究機構	准教授	
	對梨成一	文学部	助教	
	田村昌彦	文学部	特任助教	
	村上嵩至	文学部	助手	
	春日秀朗	文学部	助手	
	織田涼	文学部	助手	
	土田菜穂	総合心理学部	助手	
	中妻拓也	総合心理学部	助手	
	京屋郁子	総合心理学部	特任助教	
	都賀美有紀	総合心理学部	特任助教	
	吉田容子	法務研究科	客員教授	
	平岡義博	衣笠総合研究機構	客員教授	
	浜田寿美男	衣笠総合研究機構	客員教授	
学内の若手研究者	専門研究員・研究員	金成恩	R-GIRO	専門研究員
		相澤育郎	R-GIRO	専門研究員
		山崎優子	R-GIRO	専門研究員
		孫怡	R-GIRO	専門研究員
		由井秀樹	衣笠総合研究機構	専門研究員
		吉田一史美	衣笠総合研究機構	専門研究員
		中尾麻伊香	衣笠総合研究機構	専門研究員
		川端美季	衣笠総合研究機構	専門研究員
		澤野美智子	OIC 総合研究機構	専門研究員
		山田早紀	R-GIRO	研究員

補助研究員・リサーチアシスタント	山口慶江	R-GIRO	補助研究員
	川本静香	R-GIRO	補助研究員
	廣瀬翔平	R-GIRO	リサーチアシスタント
	妹尾麻美	R-GIRO	リサーチアシスタント
大学院生	中田友貴	文学研究科	博士後期課程/JSPS 特別研究員 DC
	神崎真実	文学研究科	博士後期課程/JSPS 特別研究員 DC
	西田勇樹	文学研究科	博士後期課程/JSPS 特別研究員 DC
	亀井隆幸	文学研究科	博士後期課程
	田一葦	文学研究科	博士後期課程
	汪 為	社会学研究科	博士後期課程
	山中恵利子	社会学研究科	博士後期課程
	西田朗子	社会学研究科	博士後期課程
	手島洋	社会学研究科	博士後期課程
	大原ゆい	社会学研究科	博士後期課程
	小嶋理恵子	社会学研究科	博士後期課程
	金森京子	社会学研究科	博士後期課程
	松元佑	社会学研究科	博士後期課程
	富井奈菜実	社会学研究科	博士後期課程
	清水大地	文学研究科	博士前期課程
	野木ももこ	文学研究科	博士前期課程
	小坂祐貴	文学研究科	博士前期課程
	北村文乃	文学研究科	博士前期課程
	齋藤絢子	文学研究科	博士前期課程
	鈴木晶斗	法務研究科	博士前期課程
	吉尾怜美	応用人間科学研究科	修士課程
	高山仁志	応用人間科学研究科	修士課程
	永井 千春	応用人間科学研究科	修士課程
	西川 めぐみ	応用人間科学研究科	修士課程
	松岡 園子	応用人間科学研究科	修士課程
	前坂千賀子	応用人間科学研究科	修士課程
	荒木沙理奈	応用人間科学研究科	修士課程
	小山田真理子	応用人間科学研究科	修士課程
	大野静代	応用人間科学研究科	修士課程
	武居樹	応用人間科学研究科	修士課程
	地下晶里	応用人間科学研究科	修士課程
	青木美德	応用人間科学研究科	修士課程
下地咲紀	応用人間科学研究科	修士課程	
陳ティテイ	応用人間科学研究科	修士課程	
祝シンチ	応用人間科学研究科	修士課程	
Kho Wei Chen	応用人間科学研究科	修士課程	
内田一樹	応用人間科学研究科	修士課程	

	石原顕子	応用人間科学研究科	修士課程
	高祥也	応用人間科学研究科	修士課程
	立花咲葵	応用人間科学研究科	修士課程
	佐々木公子	応用人間科学研究科	修士課程
	加納恵理子	応用人間科学研究科	修士課程
	谷口万帆	応用人間科学研究科	修士課程
	藤村あきほ	応用人間科学研究科	修士課程
	遠藤祐希	応用人間科学研究科	修士課程
	河上美樹	応用人間科学研究科	修士課程
	鳥取直子	応用人間科学研究科	修士課程
	平松祐佳	応用人間科学研究科	修士課程
	山田雄登	応用人間科学研究科	修士課程
	岡田紗弥香	応用人間科学研究科	修士課程
	池永弥生	応用人間科学研究科	修士課程
	中塚優介	応用人間科学研究科	修士課程
	麻生祐貴	応用人間科学研究科	修士課程
	生田祥子	応用人間科学研究科	修士課程
	合川茉莉花	応用人間科学研究科	修士課程
	石田育子	応用人間科学研究科	修士課程
	谷村ひとみ	先端総合学術研究科	一貫制博士課程
	伊藤京平	先端総合学術研究科	一貫制博士課程
	シン・ジュヒョン	先端総合学術研究科	一貫制博士課程
	笹谷絵里	先端総合学術研究科	一貫制博士課程
	瀧川由美子	先端総合学術研究科	一貫制博士課程
	坂井めぐみ	先端総合学術研究科	一貫制博士課程
	西沢いづみ	先端総合学術研究科	一貫制博士課程
	佐藤伸彦	先端総合学術研究科	一貫制博士課程
	中西京子	先端総合学術研究科	一貫制博士課程
	伊東香純	先端総合学術研究科	一貫制博士課程
	橋本雄太	先端総合学術研究科	一貫制博士課程
	高木美歩	先端総合学術研究科	一貫制博士課程
その他の学内者 (非常勤講師・研究生・研修生等)	山崎校	文学部	非常勤講師
	奥野景子	応用人間科学研究科	研修生
	溝田真由加	応用人間科学研究科	研修生
	黄信者	文学部	学士課程
	有澤晴香	文学部	学士課程
	饗庭桃子	文学部	学士課程
	守屋彩加	文学部	学士課程
	横井風音	文学部	学士課程
	大橋佳奈	文学部	学士課程
	片桐愛里沙	文学部	学士課程
	加藤桃子	文学部	学士課程
	毛利優花	文学部	学士課程
	星田雅弘	文学部	学士課程

	伊藤綾子	文学部	学士課程
客員協力研究員	大川一郎	衣笠総合研究機構	客員研究員
	安井美鈴	衣笠総合研究機構	客員研究員
	戸名久美子	衣笠総合研究機構	客員研究員
	高橋伸子	衣笠総合研究機構	客員研究員
	石川真理子	衣笠総合研究機構	客員研究員
	坂口佳江	衣笠総合研究機構	客員研究員
	孫琴	衣笠総合研究機構	客員研究員
	宮裕昭	衣笠総合研究機構	客員研究員
	北原靖子	衣笠総合研究機構	客員研究員
	加藤知佳子	衣笠総合研究機構	客員研究員
	乾明紀	衣笠総合研究機構	客員研究員
	古川心	衣笠総合研究機構	客員研究員
	松下健	衣笠総合研究機構	客員研究員
	村本詔司	衣笠総合研究機構	客員研究員
	破田野智美	衣笠総合研究機構	客員研究員
	與久田巖	衣笠総合研究機構	客員研究員
	荒川歩	衣笠総合研究機構	客員研究員
	大谷通高	衣笠総合研究機構	客員研究員
	上村晃弘	衣笠総合研究機構	客員研究員
	破田野智己	衣笠総合研究機構	客員研究員
	村上慎司	衣笠総合研究機構	客員研究員
	棟居徳子	衣笠総合研究機構	客員研究員
	松島京	衣笠総合研究機構	客員研究員
	高山一夫	衣笠総合研究機構	客員研究員
	荒木晃子	衣笠総合研究機構	客員研究員
	中西真	衣笠総合研究機構	客員研究員
	荒木美知子	衣笠総合研究機構	客員研究員
	春日彩花	衣笠総合研究機構	客員研究員
	藤戸麻美	衣笠総合研究機構	客員研究員
	安田祥子	衣笠総合研究機構	客員研究員
ポーター倫子	衣笠総合研究機構	客員研究員	
津幡法胤	衣笠総合研究機構	客員研究員	
中野リン	衣笠総合研究機構	客員研究員	
植村要	衣笠総合研究機構	客員研究員	
伏見裕子	衣笠総合研究機構	客員研究員	
笹倉香奈	衣笠総合研究機構	客員研究員	
吉田甫	衣笠総合研究機構	客員研究員	
その他の学外者	具志堅伸隆	東亜大学	准教授
	古賀弥生	活水女子大学	教授
	中原咲子	人間発達研究所	
	重富紗希	草津市	発達相談員
	高尾美妃	大津市	発達相談員
	荒木久理子	花ノ木医療福祉センター	心理判定員

	佐々木幸子	京都府教育委員会	スクールカウンセラー
	村上歩実	南丹市	発達相談員
	横田聖子	NPD 法人ばれっと	
	三野範子	久御山町役場	発達相談員
	目黒朋	大阪健康福祉短期大学	
	小林里帆	久御山町役場	
	西川大輔	京都府立特別支援学校	
	角崎洋平	佛教大学	JSPS 特別研究員
	堀田義太郎	東京理科大学	講師
	久保樹里	大阪歯科大学	教授
	玉置えみ	学習院大学	准教授
	木戸彩恵	関西大学	准教授
	木村尚子	広島市立大学	客員研究員
	福田茉莉	島根大学	助教
研究所・センター構成員 計 220 名 (うち学内の若手研究者 計 82 名)			

III. 研究業績

本欄には、「II. 拠点構成員の一覧」に記載した研究者の研究業績のうち、拠点に関わる研究業績を全て記載してください。(2017年3月31日時点)

1. 著書							
No.	氏名	著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	その他編者・著者名	担当頁数
1	松原洋子	「図書館の障害者サービスと電子書籍」松原聡編『電子書籍アクセシビリティの研究』	単著	2017年1月	東洋大学出版会		65-89
2	土田宣明	よくわかる高齢者心理学	分担執筆	2016年6月	ミネルヴァ書房	佐藤眞一・権藤恭之(編著)	44-45,52-61
3	土田宣明	認知症ケア用語辞典 精神的ケア他 10項目	分担執筆	2016年11月	ワールドプランニング)	
4	矢藤優子	『インクルーシブ社会研究』第17号 対人援助の新展開—理論・方法・制度の視点から—	共編著	2017年3月	立命館大学人間科学研究所	相澤育郎	
5	サトウタツヤ	Making of the Future: Trajectory Equifinality Approach	共編著	2016年9月	Information Age Publishing	Naohisa Mori and Jaan Valsiner	1-207
6	サトウタツヤ	高橋登・山本登志哉(編)『おこづかいの文化発達心理学』	共著	2016年9月	新曜社		199-212
7	サトウタツヤ	Collected papers on Trajectory Equifinality Approach	単著	2017年3月	Chitose Press		1-213
8	安田裕子	不妊治療と夫婦関係(宇都宮博・神谷哲司(編), 夫と妻の生涯発達心理学—関係性の危機と成熟)	単独	2016年5月	福村出版		103-116
9	安田裕子	周産期・乳児期における死(川島大輔・近藤恵(編), はじめての死生心理学—現代社会において、死とともに生きる)	単独	2016年10月	新曜社		85-99

10	村本邦子	子どもと離婚～合意解決と履行の支援	共著	2016年4月	信山社	二宮周平・渡辺惺之編(第2章 III-2「ドイツ・シュトゥットガルトにおける機関連携」・第3章 I「複雑な家族問題のために子どもを中心にした解決を創造する」翻訳+補論)	193-196、215-227
11	村本邦子	児童心理学の進化(書評:山極寿一『家族進化論』)	単著	2016年6月	金子書房	稲垣佳代子・河合優都市・齊藤こずゑ・高橋恵子・高橋知音・山祐輔(編集)	322-326
12	美馬達哉	昭和後期の科学思想史	分担執筆	2016年6月	勁草書房	金森修編	339-394
13	美馬達哉	シリーズ精神医学の哲学3 精神医学と当事者	分担執筆	2016年11月	東京大学出版会		34-61
14	美馬達哉	ブレインサイエンス・レビュー2017	分担執筆	2017年2月	クバプロ		271-282
15	浅田和茂	遠ざかる風景 私の刑事法研究	単著	2016年12月	成文堂		
16	稲葉光行	混合研究法としてのグラウンデッドなテキストマイニング・アプローチ	共著	2016年9月	抱井尚子・成田慶一(編)『混合研究法への誘いー質的・量的研究を統合する新しい実践研究アプローチ』遠見書房	抱井尚子	
17	稲葉光行	コンピュータを用いた供述の可視化とその分析	単著	2017年3月	浜田寿美男・指宿信・木谷明・後藤昭・佐藤博史・浜井浩一(編)『供述をめぐる問題(シリーズ 刑事司法を考える 第1巻)』岩波書店		
18	野田正人	教育の最新事情がよくわかる本3	分担執筆	2016年6月	教育開発研究所	教育開発研究所編	113-118
19	小澤亘	地域福祉のエンパワメントー協働がつむぐ共生と暮らしの思想	共編著	2017年3月	晃洋書房	加藤博史 他	115-250
20	津止正敏	NHK ラジオ深夜便 こころの時代 インタビュー集1「男性介護者の輪を作る」	共著	2017年3月	名著出版	増川敏英 池田武邦 市川たい子 飯田進 他5人	53-66
21	櫻谷真理子	ひきこもる子ども・若者の思いと支援	共編著	2016年7月	三学出版	春日井敏之、竹中哲夫、藤本文朗	244-264
22	大谷いづみ	「第9章 人間の尊厳と死ー「死の尊厳」の語られ方を読み解く」、柏木恵子・高橋恵子編『人口の心理学へー少子高齢社会の命と心』	単著	2016年7月	ちとせプレス		183-197
23	春日井敏之	春日井敏之・櫻谷真理子・竹中哲夫・藤本文朗編『ひきこもる子ども・若者の思いと支援ー自分を生きるためにー』	編著	2016年7月	三学出版	櫻谷真理子・竹中哲夫・藤本文朗編	178-218
24	湯浅俊彦	デジタルが変える出版と図書館ー立命館大学文学部湯浅ゼミの1年	編著	2016年4月	出版メディアパル		2-3、7-24、229-244、
25	服部雅史	最新 認知心理学への招待:心の働きとしくみを探る [改訂版]	共著	2016年10月	サイエンス社	御領 謙・菊地正・江草浩幸・伊集院睦雄・井関龍太	
26	服部雅史	Dual frames in causal reasoning and other types of thinking	分担執筆	2016年10月	Routledge, The thinking mind (N. Galbraith, E. Lucas, & D. Over, Eds.)	Over, D., Hattori, I., Takahashi, T., & Baratgin, J.	98-114
27	北岡明佳	おばけトリックアート3 おばけめいるにチャレンジ	監修	2016年11月	あかね書房	グループ・コロンプス(構成・文)	

28	北岡明佳	おもしろサイエンス 錯視の科学	単著	2017年1月	日刊工業新聞社		
29	廣井亮一	『犯罪心理学事典』	分担執筆	2016年9月	丸善出版		722-723
30	山本博樹	学校での効果的な援助をめざして	分担執筆	2016年	ナカニシヤ書店	水野治久・家近早苗・石隈利紀(編)	児童生徒の学習支援—教材研究の視点から—
31	宇都宮博	夫と妻の生涯発達心理学—関係性の危機と成熟—(担当:恋愛から婚約、結婚への道のり—夫婦関係の成立に向けて—)	共編著	2016年5月	福村出版	神谷哲司(編)	
32	宇都宮博	世代継承性研究の展望(担当:高齢期・定年退職期の世代継承性)	分担執筆	2017年	ナカニシヤ出版	渡邊照美	
33	宇都宮博	家族心理学ハンドブック(担当:中年期・老年期)	分担執筆	2017年	金子書房	日本家族心理学会(編)	
34	宇都宮博	児童心理・発達科学ハンドブック第7版(担当:変わりゆく家族と社会情動的発達)	共訳	2017年	福村出版	二宮克美・子安増生(監訳)	
35	三田村仰	臨床心理学第16巻第4巻—認知行動療法を使いこなす。熊野 宏昭・伊藤 絵美・杉山 雅彦(編)(担当:分担執筆, 範囲:三田村 仰 文脈としての自己を促す—アクセプタンス&コミットメント・セラピーにおけるマインドフルネス)	分担執筆	2016年7月	金剛出版		
36	三田村仰	臨床心理学第17巻第1巻—「こんなときどうする？」に答える20のヒント:心理職の仕事術。(担当:分担執筆, 範囲:三田村 仰 心理検査を実施すべきか否かをどう判断するのか?—コミュニケーション・ツールとしての心理検査)	分担執筆	2017年1月	金剛出版		31-33
37	吉沅洪	『心理トラウマ治療技法の解析』(《心理創傷治療技術解析》)	共編著	2016年10月	重慶出版社	陶新華	第1部第7章「動的家族画におけるトラウマの表現」
38	立岩真也	On Private Property, English Version	単著	2016年9月	Kyoto Books		
39	森久智江	司法の期待に福祉はどう応えるのか〜福祉の自立性と司法との連携〜	共著	2016年8月	独立行政法人国立重度知的障害者施設のぞみの園	加藤幸雄・水藤昌彦	
40	堀江未来	Faculty Training for Non-Native Speakers of English at Japanese Universities: Effective English-Medium Teaching for a Culturally Diversified Student Population. In Bradford, A. & H. Brown (eds). English-Medium Instruction in Japanese Higher Education: Policy, Challenges and Outcomes.	共著	2016年	Bradford, A. & H. Brown (eds) (2016). English-Medium Instruction in Japanese Higher Education: Policy, Challenges and Outcomes.		
41	堀江未来	多文化間共修:多様な文化背景をもつ大学生の学び合いを支援する	共編著	2017年3月	学文社	坂本利子・米澤由香子(編著)	

42	澤野美智子	乳がんと共に生きる女性と 家族の医療人類学：韓国の 「オモニ」の民族誌	単著	2017年2月	明石書店			
----	-------	---	----	---------	------	--	--	--

2. 論文								
No.	氏名	著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行年月	発行所、発表雑誌、巻・号数	その他編者・著者名	担当頁数	査読有無
1	松原洋子	「大学図書館における障害者サービス」	単著	2016年7月	『図書館雑誌』(110巻7号)		414-415	
2	松原洋子	「大学図書館のアクセシビリティ・テキストデータ提供サービスを中心に」	単著	2016年7月	『図書館界』(68巻2号)		96-101	
3	松原洋子	「大学図書館におけるプリント・ディスプレイのある利用者に対する環境整備と合理的配慮提供の課題—立命館大学図書館のテキストデータ提供サービスを事例に」	共著	2016年11月	『図書館界』(68巻4号)	植村要	266-278	
4	松原洋子	「障害者から産むことを奪った強制不妊手術」	単著	2016年12月	『女も男も』(128号)		29-34	
5	松原洋子	「人口問題の設定と生殖への介入—三論文へのコメント」	単著	2017年3月	由井秀樹・松原洋子編著『インクルーシブ社会研究 生殖と人口政策、ジェンダー』(16巻)		80-83	
6	松田亮三	Public/Private Health Care Delivery in Japan: And Some Gaps in “Universal” Coverage.,	単著	2016年8月	Global Social Welfare(3巻)		201-212	
7	松田亮三	福祉国家におけるケア供給の意義—医療の健康への寄与を中心に—	単著	2016年9月	近藤克則編著『ケアと健康—地域・健康・病い(講座ケア 4巻)』(京都：ミネルヴァ書房)		239-263	
8	中村正	臨床社会学の方法(13)社会構築主義	単著	2016年6月	対人援助学マガジン(7巻1号)		20-29	
9	中村正	暴力臨床の実践と理論	単著	2016年7月	季刊 刑事弁護(87号)		74-77	
10	中村正	臨床社会学の方法(14)男らしさのラビリンス(迷宮)	単著	2016年9月	対人援助学マガジン(7巻2号)		28-39	
11	中村正	臨床社会学の方法(15)社会的孤立と感情的苦痛—嗜癖と嗜虐の背後にあるもの—	単著	2016年12月	対人援助学マガジン(第7巻第3号)		23-35	
12	中村正	孤立する関係性とドメスティック・バイオレンス：三重の沈黙化作用(サイレンシング)	単著	2017年1月	青少年問題(第62巻秋季号(通巻665号))		10-17	
13	中村正	臨床社会学の方法(16)治療的司法	単著	2017年3月	対人援助学マガジン(第7巻第4号)		22-32	
14	中村正	不安定な男性性と暴力	単著	2017年3月	立命館産業社会論集(第52巻第4号)		1-17	
15	山本耕平	韓日における子ども・若者の生活困難状態に関する基礎的研究—「家出」問題	共著	2016年6月	立命館産業社会論集(52巻1号)	岡部茜、林徳栄、深谷弘和、丸山里美	131-148	

		に対する韓国の青少年政策に注目して一						
16	石倉康次	社会福祉研究の課題と方向性—承認とケアの倫理にもふれて一	単著	2017年3月	福祉のひろば			
17	土田宣明	プリコンセンプションから科学的概念への変容過程	共著	2016年6月	教育心理学研究(64巻2号)	春日彩花	184-198	
18	サトウツツヤ	History of "History of Psychology" in Japan	共著	2016年6月	Japanese Psychological Research(58巻SP1号)	Hazime Mizoguchi, Ayumu Arakawa, Souta Hidaka, Miki Takasuna and Yasuo Nishikawa	110-128	
19	サトウツツヤ	Editorial: History of Psychology in Japan and Within the Context of East Asia (pages 1-3)	共著	2016年6月	Japanese Psychological Research(58巻SP1号)	Yasuhiro Omi		
20	安田裕子	書評「抱井尚子(2015)混合研究法入門—質と量による統合の—アート 医学書院」	単著	2016年9月	質的心理学フォーラム(8号)		104-105	
21	安田裕子	法と心理学会第16回大会 ワークショップ 児童期の性的虐待被害とその回復をめぐる法心理 2—ドイツ・韓国調査の報告(指定討論—臨床心理学的観点から)	共著	2016年10月	法と心理(16巻1号)	松本克美・金成恩		
22	若林宏輔	裁判員裁判における評議パターンの提案—質的・量的分析の統合から—	共著	2016年7月	立命館大学人間科学研究(35巻)	小坂祐貴・山崎優子・石崎千景・中田友貴・サトウツツヤ	49-67	
23	若林宏輔	心理学における取調べ録音・録画の利用の今後	単著	2017年1月	季刊刑事弁護(89号)		138-142.	
24	増田梨花	ピクチャーブックヒーリング 東日本復興支援チーム石巻「絵本と音楽のコラボレーションイベント」の実施報告	共同	2016年9月	日本臨床教育学会第6回研究大会発表要旨集録	谷口真帆 ロビン・ロイド		
25	増田梨花	学校外部者がピア・サポートトレーニングを行うことの意義とは —A 高校での『振り返りシート』での生徒からのコメントに焦点を当てて—	共同	2016年10月	日本ピア・サポート研究大会抄録集	内田一樹		
26	増田梨花	ピア・サポートトレーニングを受けた生徒の変容 —ICT活用授業におけるグループワークを通して—	共同	2016年10月	日本ピア・サポート学会第15回研究大会抄録集	竹田美保・小袋伸枝・松下健・中野修・松田東子		
27	増田梨花	「高大連携プログラム」におけるピア・サポート実践 —ピ	共同	2016年10月	日本ピア・サポート学会第15回研究大会抄録集	彦坂菜里・小林由季・平井一成・南大貴・関塚倫子・		

		ア・サポート実践を通してみられる高校 瑛の変化の気づきー				河美善・畑中樹 奈・藤田瑞紀・春 日井敏之		
28	増田梨花	復興地におけるピア・サポート活動ー 絵本と音楽のコラボレーションイベント を通してー	共同	2016年10 月	日本ピア・サポート学会第15 回研究大会抄録集	内田一樹		
29	増田梨花	ピア・サポートプログラムを活かした 2016年度高大連携の 取り組みー院生の 変容プロセスに焦点 をあててー	共同	2016年10 月	日本ピア・サポート学会第15 回研究大会抄録集	河美善・小林由 季・彦坂菜里・平 井一成・南大貴・ 関塚倫子・畑中樹 奈・藤田瑞紀・春 日井敏之		
30	増田梨花	絵本の読み合わせと 音楽のライブイベン トにおける心理学的 な介入の検討	共著	2016年11 月	日本学校保健学会 第63回 学術大会		132	
31	増田梨花	浦和学院高校におけ るカウンセリングの 印象変容	共著	2016年11 月	日本学校保健学会 第63回 学術大会	松下健、松田東子、 中野修、小袋伸枝、 上村春彦、小沢友 紀雄	131	
32	増田梨花	高校生のBLS教育と 救命処置における自 己効力感	共著	2016年11 月	日本学校保健学会 第63回 学術大会	松下健、松田東子、 中野修、小袋伸枝、 上村春彦、小沢友 紀雄	155	
33	増田梨花	筋萎縮性側索硬化症 患者への支援ー患者 と面接者の会話分類 からの検討ー	共著	2017年1月	心理・教育相談センター年報 (第15号)	松田芳恵	75-86	
34	増田梨花	絵本を活用した包括 的教育プログラムの 意義ー蘇州における 心理カウンセラーや 教員を対象としたワ ークショップを通して のー考察ー	単著	2017年1月	心理・教育相談センター年報 (第15号)		129-139	
35	増田梨花	中国における絵本を 活用したピア・サポ ートトレーニングの 実践ー国際表現性心 理学会主催のワーク ショップを通してー	単著	2017年1月	心理・教育相談センター年報 (第15号)		91-100	
36	増田梨花	桜井論文に対するコ メント	単著	2017年2月	東洋英和女学院大学大学院心 理相談室紀要			
37	増田梨花	「健康と安全」を推 進しその中で日本初 ISS 認証を受けた高 等学校の取組	共著	2017年3月	学校保健学研究	小袋伸枝、竹田美 保、五十嵐恵子、 山本紘子、松下健、 上村春彦、松田東 子、高間薫、小沢 友紀雄、		
38	村本邦子	周辺からの記憶 11： 2013年度むつ・多賀 城・宮古	単著	2016年6月	対人援助学マガジン(7巻1号)		176-190	
39	村本邦子	周辺からの記憶 12： 災害とコミュニティ ー物語、記憶、レジ リエンス	単著	2016年9月	対人援助学マガジン(7巻2号)		151-168	
40	村本邦子	周辺からの記憶 13： 2013年度福島・シン ポジウム	単著	2016年12 月	対人援助学マガジン(7巻3号)		160-173	
41	村本邦子	「女性活躍」を問う	単著	2016年12 月	国際社会福祉情報(第40号)		55-60	
42	村本邦子	境界を超えるー場 (トボス) への回帰	単著	2017年2月	女性ライフサイクル研究(25 巻)		4-12	

43	村本邦子	周辺からの記憶 14 : 2014 年度 日本コミュニ ティ心理学会・ むつ	単著	2017年3月	対人援助学マガジン(7巻4号)		168-179	
44	美馬達哉	Motion-induced disturbance of auditory-motor synchronization and its modulation by transcranial direct current stimulation (tDCS)	共著	2016年4月	Eur J Neurosci.(43巻4号)	Ono, K., Mikami, Y., Fukuyama, H.	509-515	
45	美馬達哉	書評「高野麻子著『指 紋と近代 移動する 身体の管理と統治の 技法』」	単著	2016年5月	週刊読書人(2016/5/6号)			
46	美馬達哉	脳波コヒーレンス	単著	2016年7月	Clinical Neuroscience(34巻7 号)		766-770	
47	美馬達哉	脱精神医学化の二つ のエッジ RDoC(研 究領域基準) とマッ ドネス	単著	2016年9月	現代思想(44巻17号)		73-89	
48	美馬達哉	Spatiotemporal Organization and Cross-Frequency Coupling of Sleep Spindles in Primate Cerebral Cortex.	共著	2016年9月	Sleep(39巻9号)	Takeuchi, S., R. Murai, H. Shimazu, Y. Isomura, and *T. Tsujiimoto	1719-1735	
49	美馬達哉	Stress Recovery Effects of High- and Low-Frequency Amplified Music on Heart Rate Variability	共著	2016年	Behavioural Neurology	Nakajima, Y., Tanaka, N., Izumi, S.	8	
50	美馬達哉	Combination of Static Magnetic Fields and Peripheral Nerve Stimulation Can Alter Focal Cortical Excitability	共著	2016年	Front Hum Neurosci(10巻)	Nojima, I., S. Koganemaru	598	
51	美馬達哉	Neural pattern similarity between contra- and ipsilateral movements in high-frequency band of human electrocorticograms.	共著	2016年	Neuroimage.(in press 巻)	Fujiwara, Y., R. Matsumoto, T. Nakae, K. Usami, M. Matsushashi, T. Kikuchi, K. Yoshida, T. Kunieda, S. Miyamoto, A. Ikeda and *R. Osu		
52	井上彰	"Can Luck Egalitarianism Serves as a Basis for Distributive Justice? A Critique of Kok-Chor Tan' s Institutional Luck Egalitarianism"	単著	2016年	Law and Philosophy		forthcoming	
53	稲葉光行	Research on Serious-Game Design for Inter-Cultural Understanding	共著	2016年8月	Replaying Japan 2016 Conference Abstracts	Juhyung Shin, Yan Jiao, Yehang Jiang,	81-82	

		mediated by 3D Metaverse						
54	稲葉光行	日本版イノセンス・プロジェクト	単著	2016年10月	季刊刑事弁護(88号)			72-75
55	稲葉光行	日本版のイノセンス・プロジェクト(IP)の可能性	共同	2016年10月	法と心理(16巻1号)	山田早紀、笹倉香奈、指宿信、佐藤博史、浜田寿美男		55-61
56	竹内謙彰	新しい発達診断法開発の試み(2) — 幼児期における発達の基本構造の検出 —	共著	2016年6月	産業社会論集(52巻1号)	富井奈菜実・荒木穂積・中村隆一・松島明日香・荒井庸子・松元佑		149-168
57	野田正人	新たな不登校児童生徒への支援を考える	単著	2016年12月	生徒指導学研究(第15号)			40-47
58	野田正人	「不登校予備軍」の子どもをどう見立てるか	単著	2017年2月	月刊教職研修(通巻534号)			22-23
59	小澤亘	ボランティア文化研究の挑戦 — 日・韓・加3カ国ボランティア意識調査を振り返って	単著	2016年6月	立命館産業社会論集 (52巻1号)			33-51
60	小澤亘	超高齢社会に直面する日本とボランティア・セクター	単著	2016年12月	中谷義和他編『新自由主義的グローバル化と東アジア連携と藩閥の動態分析』			197-219
61	小澤亘	JOY トークによる地域福祉のエンパワメント	共著	2017年3月	加藤博史・小澤亘編著『地域福祉のエンパワメント:協働がつむぐ共生と暮らしの思想』	伊豆田千加、森淑子		115-166
62	小澤亘	資料編:民生委員調査報告書	共著	2017年3月	加藤博史・小澤亘編著『地域福祉のエンパワメント:協働がつむぐ共生と暮らしの思想』			171-250
63	津止正敏	一人で抱え込む男性介護者への生き方モデルを	単著	2016年4月	公明(通巻124巻)			22-27
64	櫻谷眞理子	「児童養護施設退所者へのアフターケアの現状と課題」 — 施設職員へのアンケート調査を基に —	単著	2016年7月	子どもと福祉(Vol.9巻)			122-126
65	大谷いづみ	「安楽死・尊厳死」をめぐる歴史的・社会的背景(特集:「終末期医療の国民的議論」に向けて)	単著	2016年9月	『月刊保団連』(1223号)			4-9
66	大谷いづみ	「生きるに値しない生命終結の許容」はどのように語られたか — 日本法学界における「安楽死・尊厳死」論史の一断章(緊急特集:相模原障害者殺傷事件)	単著	2016年10月	『現代思想』(44巻19号)			102-113
67	斎藤真緒	「〈総論〉増える男性介護者の実態と家族介護者への支援の課題」	単著	2016年8月	コミュニティ・ケア(229号)			50-55
68	斎藤真緒	Current Issues regarding Family Caregiving and Gender Equality in Japan: Male Caregivers and the Interplay between Caregiving and Masculinities	単著	2016年	Ja(14巻1号)			92-111

69	岡本尚子	小学校教員養成における正課外行事での教職能力育成の可能性	共著	2017年3月	立命館産業社会論集(52巻4号)	山下芳樹	83-96	
70	湯浅俊彦	これからの図書館の可能性を探る	単著	2016年5月	子どもの文化(48巻5号)		21-25	
71	湯浅俊彦	書評『図書館を変える！ウェブスケールディスカバリー入門』	単著	2016年7月	専門図書館(278号)			
72	湯浅俊彦	指定管理者制度が切り拓く次世代型公共図書館の可能性	単著	2017年2月	出版ニュース(2437号)		4-11	
73	八木保樹	Can Spontaneous Trait Inferences be Based on Spontaneous Motive Inferences?	共著	2017年2月	立命館人間科学研究(35号)	TANIGUCHI Yuri	103-114	
74	八木保樹	安全感を喚起する重要他者の想起が恋愛の欺瞞場面に及ぼす効果	共著	2017年	ストレス科学研究	亀井隆幸		
75	服部雅史	Model fitting data in syllogistic reasoning experiments	単著	2016年10月	Data in Brief(-巻-号)		-	
76	服部雅史	Probabilistic representation in syllogistic reasoning: A theory to integrate mental models and heuristics	単著	2016年10月	Cognition(157巻)		296-320	
77	北岡明佳	錯視について	単著	2016年4月	毛髪科学(117巻)		23-24	
78	北岡明佳	D. マイヤーズ著, 村上郁也訳 カラー版 マイヤーズ心理学	単著	2016年9月	基礎心理学研究(35巻1号)		11-12	
79	北岡明佳	顔の美しさ・好ましさ・魅力評価と目の属性の関係	共著	2016年11月	日本顔学会誌(16巻2号)	光廣可奈子	83-92	
80	廣井亮一	少年非行といじめをめぐる法と倫理	単著	2016年6月	家族心理学ハンドブック			
81	廣井亮一	非行少年は凶悪化しているかー現代の非行を考える	単著	2016年7月	『月間福祉』(7月号)		56-57	
82	山本博樹	高齢者の構造方略ならびに手順説明文の理解に及ぼす標識化効果—MMSE 得点に応じて異なる効果の過程—	共著	2017年3月	立命館文学(652巻)	織田涼・東山篤規	120-132.	
83	山本博樹	説明実践を支える教授・学習研究の動向	単著	2017年3月	教育心理学年報(56巻)			
84	岡本直子	幼児期における現実とファンタジーー商業主義やメディアによるファンタジーが氾濫する現代に生きる幼児へのかかわりのヒントとしてー	単著	2016年6月	モンテッソーリ教育第49号			
85	岡本直子	精神疾患に NIRS を用いた先行研究の概観ーNIRS による思考場療法の有効性の	共著	2016年12月	大阪夕陽丘学園短期大学紀要(59号)	與久田巖	24-35	

		検討に向けてー						
86	林勇吾	Lexical Network Analysis on an Online Explanation Task: Effects of Affect and Embodiment of a Pedagogical Agent	単著	2016年6月	IEICE Transactions on Fundamentals of Electronics, Communications and Computer Sciences(E99-D 巻6号)			1455-1461
87	林勇吾	Coordinating knowledge integration with pedagogical agents: Effects of agent gaze gestures and dyad synchronization	単著	2016年6月	Proceeding of the 13th International Conference on Intelligent Tutoring Systems(ITS2016), Lecture Notes in Computer Science, Springer-Verlag)			254-259
88	林勇吾	Unifying Conflicting Perspectives in Group Activities: Roles of Minority Individuals	共著	2016年8月	Proceedings of the 38th Annual Conference of the Cognitive Science Society(CogSci2016)	Miwa, K. Terai, H.		247-252
89	林勇吾	The effect of "mood": Groupbased collaborative problem solving by taking different perspectives	単著	2016年8月	Proceedings of the 38th Annual Conference of the Cognitive Science Society(CogSci2016)			818-823
90	林勇吾	Effects of Deformed Embodied Agent during Collaborative Interaction Tasks: Investigation on Subjective Feelings and Emotion	共著	2016年10月	Proceedings of the 4th international conference on Human-Agent Interaction (HAI2016)	Kitamura, A.		235-237
91	林勇吾	傾聴エージェントの実現に向けた傾聴会話参加者の自己評価による数値化モデルの提案	共著	2016年11月	ヒューマンインタフェース学会論文誌(18巻4号)	黄宏軒 濑澤紗優美 川越恭二		373-384
92	林勇吾	Negative electronic word-of-mouth can support product recommendation: experimental investigation	共著	2017年2月	Proceedings of the 20th ACM Conference on Computer-Supported Cooperative Work and Social Computing(CSCW 2017)	Orita, R.Kajiwara, S.		191-194
93	林勇吾	Can AI become reliable source to support human decision making in a court scene?	共著	2017年2月	Proceedings of the 20th ACM Conference on Computer-Supported Cooperative Work and Social Computing(CSCW 2017)	Wakabayashi, K.		195-198
94	三田村仰	常に不適應感到悩まされ、うつ病と診断されていた50代男性に対する介入ーACT初心者である臨床心理士の経験と考察ー	共著	2016年9月	行動療法研究(42巻3号)	菊田和代・武藤崇		
95	吉沅洪	四川大地震における学生の喪失体験と中学校教師が行う心理援助に関する質的分析ーあいまいな喪失を視点に入れてー	共著	2017年1月	立命館大学心理・教育相談センター年報(15巻)	汪為		25-40

96	吉沅洪	アジアにおける災害 後心理支援の現在 —第七回アジア災害 後心理支援国際的学 術検討会を通して—	共著	2017年1月	立命館大学心理・教育相談セ ンター年報(15巻)	馬珊瑚、陳婷婷、 祝心怡、汪為	119-128	
97	小泉義之	デカルト——存在と 実存：「私」と「現」 における	単著	2016年	秋富克哉他編『続・ハイデガ ー読本』			
98	小泉義之	過渡期の精神	単著	2016年	現代思想(44巻17号)		60-72	
99	小泉義之	真理の探究における 同伴者——木村敏の 離人症論に寄せて	単著	2016年	現代思想(44巻20号)		226-237	
100	立岩真也	「生の現代のため に・12——連載 123」	単著	2016年4月	『現代思想』(44巻10号)			
101	立岩真也	「生の現代のため に・13——連載 124」	単著	2016年5月	『現代思想』(44巻12号)			
102	立岩真也	「生の現代のため に・14——連載 125」	単著	2016年6月	『現代思想』(44巻13号)		18-29	
103	立岩真也	「生の現代のため に・15——連載 126」	単著	2016年7月	『現代思想』(44巻15号)		16-27	
104	立岩真也	「七・二六殺傷事件 後に」	単著	2016年8月	『現代思想』(44巻17号)		196-213	
105	立岩真也	「七・二六殺傷事件 後に 2」	単著	2016年9月	『現代思想』(44巻19号)		133-157	
106	立岩真也	「生の現代のため に・16——連載 127」	単著	2016年10 月	『現代思想』(44巻21号)		16-28	
107	立岩真也	「生の現代のため に・(番外篇) ——連 載 128」	単著	2016年11 月	『現代思想』(44巻22号)		89-21	
108	松本克美	損害賠償と労災保険 法上の遺族補償年金 の損益相殺的調整の 方法—フォーカスシ ステムズ事件」	単著	2016年4月	法律時報(88巻5号)		146-149	
109	松本克美	建築瑕疵についての 損害賠償請求権の消 滅時効・除斥期間の 起算点 — 東京高 裁平成25年10月 31日判時2264号52 頁	単著	2016年4月	判例評論(687号)		155-159	
110	松本克美	損益相殺における 『利益』概念の再検 討—控除否定根拠と しての『不利益性』 可視化論— 立命館 法学366号	単著	2016年8月	立命館法学(366号)		599-621	
111	松本克美	不動産と製造物責任	単著	2016年10 月	立命館法学(367号)		870-887	
112	松本克美	建物吹付けアスベ ストによる健康被害を 惹起した土地工作物 の『瑕疵』の判断時 期と判断要素—最高 裁第二小法廷平成25 年7月12日判決	単著	2016年10 月	法律時報(88巻11号)			
113	森久智江	刑の一部猶予制度の 運用のあり方につい て—犯罪をした人の	単著	2016年11 月	徳田靖之・石塚伸一・佐々木 光明・森尾亮編『刑事法と歴 史的価値とその交錯』(内田博		627-654	

		社会復帰の観点から			文先生古稀祝賀論文集』法律文化社			
114	森久智江	オーストラリア少年司法における Restorative Justice の現代的意義	単著	2017年3月	山口直也編著『新時代の比較少年法』成文堂		63-94	
115	北出慶子	書評論文：ライフストーリー研究の新たな枠組みへ——三代純平（編）『日本語教育学としてのライフストーリー——語りを聞き、書くということ』くろしお出版	単著	2016年8月	リテラシーズ(19巻1号)		52-65	
116	藤本学	Team Roles and Hierarchic System in Group Discussion	単著	2016年5月	Group Decision and Negotiation(25巻3号)		585-608.	
117	山浦一保	青年期の1対人関係および自己のあり方と青年の就労意識に関する構造の検討	共同	2016年	心理学の諸領域（北陸心理学会）(5巻1号)	岡田 努・榎本博明・下村英雄	41-52	
118	山浦一保	The relationship between attractiveness of female legs and their anthropometric parameters: Judgments among male Japanese college students	共同	2017年	PLOS ONE	Kurihara,T., Otsu, K., Sanada, K.,		
119	山口洋典	サービス・ラーニングによる集団的な教育実践における学習評価と実践評価のあり方	共著	2016年12月	京都大学高等教育研究(22巻)	河井亨	43-54	
120	山口洋典	支援で問われる受援力：学園による支援	単著	2017年1月	大学時報(372巻)		62-19	
121	山口洋典	震災20年・人生の選択肢を見つめなおす	単著	2017年3月	同定社大学キリスト教文化センター チャペル・アワー奨励集(294巻)		220-213	
122	由井秀樹	体外受精の臨床応用と日本受精着床学会の設立	単著	2016年7月	科学史研究(278号)		118-132	
123	山崎優子	裁判員裁判における評議パターンの提案——質的・量的分析の統合から——	共著	2016年	立命館大学人間科学研究(34号)	小坂祐貴・石崎千景・中田友貴・サトウタツヤ	49-67	
124	相澤育郎	フランスにおける刑罰適用裁判官の制度的展開（2・完）	単著	2016年	龍谷法学(49巻2号)			
125	相澤育郎	フランスにおける刑罰適用裁判官の制度的展開（1）	単著	2016年	龍谷法学(48巻3号)		273-324	

3. 研究発表等					
No.	氏名	発表題名	発表年月	発表会議名、開催場所	その他発表者名
1	松原洋子	「資料の電子化によるアクセシビリティの向上—ブリント・ディスプレイのある人の支援」	2016年6月	全国高等教育障害学生支援協議会 第2回大会分科会「授業のアクセシビリティ、ユニバーサルデザイン、支援の質の担保」	
2	松原洋子	コメント	2016年8月	第1回「人口と生殖の歴史研究会」	保明綾、杉田菜穂、由井秀樹

3	松原洋子	Rethinking the medical approach on population quality in the making of abortion policy in Japan	2017年1月	UK-Japan Seminar on the Politics and Practices of 'Low Fertility and Ageing Population' in Post-War Japan	
4	松田亮三	Exploring a Public/Private Nexus of Health Care Provision: Ideas, Regulatory Frameworks, and Adaptability	2016年7月	Third ISA Forum of Sociology	
5	松田亮三	A Comparative Politics of Funding in England and Japan: Policy problems and Institutions	2016年7月	The 24th World Congress of Political Science (July 23-28, 2016)	
6	松田亮三	Politics of Institutionalizing Economic Appraisal in Health Care in Japan	2016年9月	The 11th meeting of the International Society for Priorities in Health (ISPH)	
7	中村正	対人援助学会理事会企画シンポジウム「相模原事件を考える」	2016年9月	第8回対人援助学会	臼井正樹・梁陽一・岸部
8	中村正	男性性の傷つきに敏感なジェンダー臨床論のために (その5) -1980年代「ぼっち君」の大学生活にみる男性性ジェンダーの考察-	2016年9月	第8回対人援助学会	國友万裕
9	中村正	「物語」を手掛かりにした東日本大震災後コミュニティ支援の実践-ホモ・ナラティブリスト(物語る人間)と聴く人が出会う「復興の証人10年プロジェクト」から-	2016年9月	第8回対人援助学会	村本邦子
10	中村正	情状弁護の質的転換を考える	2016年10月	第17回法と心理学会	
11	中村正	大会企画シンポジウム: 対話 なぜ、人間の子育てに共同保育が不可欠なのか? ~多様に協働・共同する子育てと暴力・虐待防止~(山極寿一、黒田公子とのダイアローグ)	2016年11月	日本子ども虐待防止学会第23回おおさか大会	
12	中村正	脱暴力に向けた保護者へのグループ・アプローチ-児相と民間(大学)の協働-	2016年11月	日本子ども虐待防止学会第23回おおさか大会	
13	山本耕平	일본의 청년기 발달을 지원하는 주택정책과 실천에 관한 검토 (日本における青年期の発達を支える住宅政策と実践に関する検討)	2016年9月	韓国健康社会研究院招待講演	
14	石倉康次	部落解放運動と三木一平 ~戦後初期の運動に関わる三木資料の検討を中心に~	2016年10月	部落問題研究者全国集会	
15	石倉康次	社会福祉研究の課題と方向性-承認とケアの倫理にもふれて-	2017年1月	総合社会福祉研究所合宿研究会	
16	土田宣明	運動を抑える手続きの効果-年代差の比較-	2016年5月	日本発達心理学会第27回大会	
17	土田宣明	The intervention of Wonderful Aging: A program to find the meaning of life	2016年7月	The 31st International Congress of Psychology	Kusaka, N., Narumoto, J.
18	土田宣明	Endogenous shift of attention elicited by	2016年7月	The 31st International Congress of Psychology	Kato, C., et al.

		eye-gaze is related to the decline in frontal lobe function in older adults			
19	土田宣明	The d2-R test: Comparative studies in selective attention between French and Japanese elderlies/students	2017年3月	The Asian Conference on Psychology & the Behavioral Sciences 2017	Yato, Y., Hirose, S., Tsuchida, Wallon, P., Mesmin, C., & Jobert, M.
20	土田宣明	運動抑制に影響する要因の年齢差	2017年3月	日本発達心理学会第28回大会	
21	矢藤優子	学童期における系列化の発達—円系列課題を用いて—	2016年4月	日本発達心理学会第27回大会	富井 奈菜実・荒木 穂積・廣瀬 翔平
22	矢藤優子	デジタルペンを用いた描画発達検査における描画プロセスの検討：幼児期から学童期の発達の變化に注目して	2016年5月	日本発達心理学会第27回大会	廣瀬翔平・荒木穂積・富井奈菜実・Philippe Wallon・Claude Mesmin・Matthieu Jobert
23	矢藤優子	デジタルペンを用いた線描画課題における子どもの行動制御能力の発達の變化の検討	2016年5月	日本発達心理学会第27回大会	廣瀬 翔平・荒木 穂積・富井 奈菜実
24	矢藤優子	Quantitative dynamic analysis of developmental changes in children's drawing activities through the Digital Pen	2016年7月	31st International Congress of Psychology	
25	矢藤優子	Relation between self-regulation and social interaction in the youngest class of kindergarten: A short-term longitudinal study.	2016年7月	31st International Congress of Psychology	Hirose, Shohei,
26	矢藤優子	Applicability of French "Palate Education" to Japanese Preschoolers	2016年7月	31st International Congress of Psychology	Ito, Y.
27	矢藤優子	創造性と自己表現・その光と影—教育・支援のありかたといじめ問題—	2016年9月	立命館グローバル・イノベーション研究機構「学融的な人間科学の構築と科学的根拠に基づく対人援助の再編成」主催、立命館大学人間科学研究所「学融的な人間科学の構築プロジェクト」共催シンポジウム	荒木穂積, 手良村昭子, 金網知征, 戸田有一
28	矢藤優子	Interaction Rating Scale: Evaluating caregiver-child relationships through observable behaviours.	2016年9月	British Psychological Society Developmental Psychology Section Annual Conference	
29	矢藤優子	縦断研究のこれまでとこれから：科学的根拠に基づく対人援助を目指して	2016年12月	「対人援助の新展開：理論・方法・制度の視点から」	菅原ますみ・安梅勲江
30	矢藤優子	「養育者と乳幼児の社会的関係性に関する研究：行動観察、指標開発から縦断研究まで」	2016年12月	発達心理学会関西地区懇話会	
31	矢藤優子	The D2-R Test: Comparative Studies in Selective Attention between French and Japanese Elderlies/Students	2017年3月	The Asian Conference on Psychology & the Behavioral Sciences	Shohei Hirose, Noriaki Tsuchida, Philippe Wallon, Claude Mesmin, Matthieu Jobert
32	サトウタツヤ	Development of qualitative psychology in Japan: Trajectory Equifinality Approach	2016年7月	31st International Congress of Psychology	

		(TEA)			
33	サトウタツ ヤ	The experience of Bifurcation Point: Where DS and TEA meets	2016年9月	The 9th International Conference on the Dialogical Self	
34	サトウタツ ヤ	歴史の中のパーソナリティ: WWII終了まで	2016年9月	第25回日本パーソナリティ心理学会	
35	サトウタツ ヤ	複線径路等至性アプローチ (TEA) 一分岐点分析の手法としてのクローバー分析	2016年9月	第13回日本質的心理学会	
36	サトウタツ ヤ	Self dialogue of Fukushima evacuator, to go home or not that is a question.	2016年10月	In occasion of the 8th Volume of Yearbook of Idiographic Science; Conference: IDIOGRAPHIC APPROACH TO HEALTH	
37	サトウタツ ヤ	Sign and culture psychology for multicultural dispute prevention	2016年11月	the 18th Norwayan Conference on Social and Community Psychology	
38	サトウタツ ヤ	質的研究がめざすものーTEA (複線径路等至性アプローチ) とその実習も交えてー	2016年11月	日本青年心理学会第24回大会	
39	サトウタツ ヤ	発達心理学と生涯発達心理学の断絶を超えてー質的心理学は何ができるか? 理論・方法論・歴史の立場から	2017年3月	日本発達心理学会第28回大会	
40	安田裕子	ライフサイクルの関係性から死生を読み解くー死生心理学の展開 (1) (周産期・乳児期の死ー親になりゆくプロセスのなかで)	2016年4月	日本発達心理学会第27回大会	近藤恵・川島大輔・白神敬介・岡本祐子・浦田悠
41	安田裕子	Troubles and tasks of the support for victims received damage of domestic violence (DV): Toward the view to support lives of sufferers in community	2016年7月	the 31st International Congress of Psychology ICP2016	
42	安田裕子	質的研究法入門ー生きた実践研究を作る (ワークショップの講師)	2016年8月	日本人間性心理学会第35回大会	森岡正芳
43	安田裕子	質的研究の産業心理臨床実践における有用性ー日常の心理臨床実践に繋げるために(口頭発表の座長)	2016年8月	日本人間性心理学会第35回大会	新田泰生
44	安田裕子	Diachronic and synchronic approaches in Compositionwork in relation to changes in the self. A dialogue between TEA and MA in Compositionwork (How can the clinical practice of 'Compositionwork' and the qualitative research of 'Narrative Approach' collaborate? A case of a woman's narrative who met a reproductive crisis)	2016年9月	the 9th International Conference on the Dialogical Self	Konopka, A., van Beers, W., Morioka, M., Sato, T., & Nameda, A.
45	安田裕子	The Experience of bifurcation point: Where DS and TEA	2016年9月	the 9th International Conference on the Dialogical Self	Sato, T., Konopka, A., Banda, K., & Tajima A.

		meets(Dialogical narratives on the critical phases on lives: From woman' s experiences who met with reproductive crisis)			
46	安田裕子	多専門・多職種連携による司法面接の展開—通達からの1年を振り返り、今後の展開を考える	2016年10月	法と心理学会第17回大会	羽瀨由子・赤嶺亜紀・田中晶子・仲真紀子・三原恵・主田英之
47	安田裕子	公開シンポジウム 子どもをめぐる法と心理臨床	2016年10月	法と心理学会第17回大会	廣井亮一・村瀬嘉代子・二宮周平・山口直也
48	安田裕子	キャリアの選択と形成—複線径路等至性アプローチを生かした生涯にわたる教育と発達支援	2017年3月	日本発達心理学会第28回大会	サトウタツヤ・番田清美・柁木史子
49	若林宏輔	Why are the numbers of citizens those? Through the comparing of the resistibility of the citizens' number in the mixed jury deliberation.	2016年7月	International workshop: Commonsense Justice? Appraising Lay Judge/Jury Criminal Trials, International Institute for the Sociology of Law	
50	若林宏輔	Studying criminal justice through psychology: Judgments, interrogation, and death penalty	2016年7月	the 31st International Congress of Psychology	
51	若林宏輔	The history of forensic psychology research in japan until 1945: Focus on the area of law,	2016年7月	the 31st International Congress of Psychology	Nakata, Y., Suzuki, A., & Sato, T.
52	若林宏輔	Analyzing the deliberation process in the mixed jury trial in Japan, from the collaborative aspect in the fairness achievement	2016年7月	the 31st International Congress of Psychology	
53	若林宏輔	評議の心理学的分析に基づく弁護実践の効果	2016年7月	第59回(平成28年度) 弁護士夏期講習—近畿地区— 評議を見据えた弁護活動はどうあるべきか	
54	若林宏輔	指定討論 大学における近年の犯罪心理学研究の展開と展望	2016年9月	第54回犯罪心理学会大会	
55	若林宏輔	取調べ可視化以降の供述分析手法について—計量的な心理学テキスト分析	2016年10月	第17回法と心理学会大会	
56	若林宏輔	陪審研究について,jury research	2016年10月	第17回法と心理学会大会	
57	若林宏輔	Can AI become reliable source to support human decision making in a court scene?	2017年2月	The 20th ACM Conference on Computer-Supported Cooperative Workand Social Computing	Hayashi, Y.,
58	増田梨花	A University-High School Joint Project that Made Use of the Peer Support Program —Focusing on Graduate Students' Transformation Process—	2016年8月	日本ピア・サポート学会シンガポール研修	Meesun Ha
59	増田梨花	筋萎縮性側索硬化症患者への支援—事例検討を通して—	2016年9月	日本心理臨床学会第35回秋季大会	松田芳恵
60	増田梨花	東日本大震災と復興の思想—臨床教育学の課題として—ピクチャーブック ヒーリング 東日本復興支援チー	2016年9月	日本臨床教育学会第6回研究大会	谷口真帆 ロビン・ロイド

		ム石巻「絵本と音楽のコラボレーションイベント」の実施報告			
61	増田梨花	絵本と音楽を活用した復興地におけるピア・サポート活動の効果	2016年10月	日本ピア・サポート学会第15回研究大会・総会	
62	増田梨花	高校・大学でのピア・サポート活動	2016年10月	日本ピア・サポート学会第15回研究大会	春日井敏之・池雅之
63	増田梨花	学校外部者がピア・サポートトレーニングを行うことの意義とは—A高校での『振り返りシート』での生徒からのコメントに焦点を当てて—	2016年10月	日本ピア・サポート学会第15回研究大会	内田一樹
64	増田梨花	ピア・サポートトレーニングを受けた生徒の変容—ICT活用授業におけるグループワークを通して—	2016年10月	日本ピア・サポート学会第15回研究大会	竹田美保・小袋伸枝・松下健・中野修・松田東子
65	増田梨花	「高大連携プログラム」におけるピア・サポート実践—ピア・サポート実践を通してみられる高校生の変化の気づき—	2016年10月	日本ピア・サポート学会第15回研究大会	彦坂茉里・小林由季・平井一成・南大貴・関塚倫子・河美善・畑中樹奈・藤田瑞紀・春日井敏之
66	増田梨花	復興地におけるピア・サポート活動—絵本と音楽のコラボレーションイベントを通して—	2016年10月	日本ピア・サポート学会第15回研究大会	内田一樹
67	増田梨花	ピア・サポートプログラムを活かした2016年度高大連携の取り組み—院生の変容プロセスに焦点をあてて—	2016年10月	日本ピア・サポート学会第15回研究大会	河美善・小林由季・彦坂茉里・平井一成・南大貴・関塚倫子・畑中樹奈・藤田瑞紀・春日井敏之
68	増田梨花	浦和学院高校におけるカウンセリングの印象変容	2016年11月	第63回日本学校保健学会	
69	増田梨花	「絵本の読み合わせと音楽のライブイベント」における臨床心理学的介入の検討	2016年11月	第63回日本学校保健学会	
70	増田梨花	タブレットを活用した高校生の食事の実態把握	2016年11月	第63回日本学校保健学会	
71	村本邦子	コミュニティの中で育つ対人援助職者「東日本・家族応援プロジェクト」5年を振り返って	2016年6月	日本コミュニティ心理学会第19回大会	
72	村本邦子	Transforming the Self to Transform the World	2016年8月	Northeast Asian Regional Peace Building Institute Workshop 2016	
73	村本邦子	臨地の対人援助学: ハワイの力 (resilience) と Kids Hurt Too Hawaii の強み (strength)	2016年9月	対人援助学会第8回大会	
74	村本邦子	「物語」を手掛かりにした東日本大震災後コミュニティ支援の実践—ホモ・ナラティブリスト (物語る人間) と聴く人が出会う「復興の証人10年プロジェクト」から—	2016年9月	対人援助学会第8回大会	中村正
75	村本邦子	支援者支援でコミュニティの力 (レジリエンス) を引き出す—「東日本・家族応援プロジェクト in むつ」の事例をもとに	2016年9月	対人援助学会	中村正・杉浦裕子
76	稲葉光行	志布志事件から日本版イノセンス・プロジェクトへ	2016年4月	シンポジウム「志布志事件をくり返すな—冤罪事件の教訓は生かされてきたのか」	

77	稲葉光行	京都府八幡市子ども会議の 取組み	2016年4月	松原市立布忍小学校校内全体研修会	
78	稲葉光行	A Trend of Digital Humanities Research in Japan: From Literary and Linguistic Computing to Digital Scholarship	2016年8月	Heritage Interfaces - Presenting Cultural Specificity in Digital Collections	
79	稲葉光行	Research on Serious-Game Design for Inter Cultural Understanding mediated by 3D Metaverse	2016年8月	Replaying Japan 2016	Juhyung Shin, Yan Jiao, Yehang Jiang
80	稲葉光行	グラウンデッドな テキストマイニング・アプ ローチ	2016年8月	三重県立看護大学若手研究者支援のた めの研修会	
81	稲葉光行	膨大な情報から浮かびあが るえん罪の真実	2016年9月	「死刑を止めよう」宗教者ネットワー ク第23回死刑廃止セミナー	
82	稲葉光行	バイアスと冤罪～日本版イ ノセンス・プロジェクトの 実践に向けて	2016年10月	法と心理学会第17回大会	笹倉香奈・遠山大輔・野平康博・指宿信・ 木谷明・浜田寿美男・平岡義博・佐藤博 史
83	稲葉光行	日本版イノセンス・プロジ ェクト（えん罪救済センタ ー）の取組み	2016年10月	部落解放研究第50回全国集会第5分科 会「狭山事件・冤罪事件を考える」	
84	稲葉光行	グラウンデッドなテキスト マイニングアプローチの概 要	2016年10月	ナーシングリサーチ研修シリーズ2「混 合研究法におけるデザインとアプロ ーチの実践セミナー」	
85	稲葉光行	グラウンデッドなテキスト マイニングアプローチの実 践	2016年10月	ナーシングリサーチ研修シリーズ2「混 合研究法におけるデザインとアプロ ーチの実践セミナー」	
86	稲葉光行	日本版イノセンス・プロジ ェクト（えん罪救済センタ ー）設立の経緯	2016年11月	九州再審弁護団連絡会	笹倉香奈、山田早紀
87	稲葉光行	Text Mining Studio を用 いた調査分析	2016年11月	数理システムユーザーコンファレンス 2016	
88	稲葉光行	日本の司法における多言語 ／多文化主義を考える～志 布志事件の事例から～	2016年12月	札幌法と心理学会	
89	稲葉光行	Children-Centered Approach for Cross-Boundary Community Development	2017年3月	University-Community Links (UCLinks) Conference 2017	
90	竹内謙彰	自閉症スペクトラム児の多 様性と自主性を尊重した療 育プログラムの開発(7) — 幼児期：他児への関心を高 める製作活動の工夫—	2016年8月	日本自閉症スペクトラム学会第15回研 究大会	石原颯子・地下昌里・陳ていてい・谷口 万帆・富井奈菜実・松元佑・荒木美知子・ 荒木穂積
91	竹内謙彰	自閉症スペクトラム児の多 様性と自主性を尊重した療 育プログラムの開発(8) — 小学校低学年：集団遊びを 成立させるためのスタッフ の工夫—	2016年8月	日本自閉症スペクトラム学会第15回研 究大会	青木美穂・立花咲葵・松元佑・荒木穂積
92	竹内謙彰	自閉症スペクトラム児の 多様性と主体性を尊重した 療育プログラム開発(9) —小学校高学年：仲間意識 を高めるルール設定の工夫 —	2016年8月	日本自閉症スペクトラム学会第15回研 究大会	高祥也・下地咲紀・祝心怡・藤村あきほ・ 松元佑・野村朋・荒木穂積
93	竹内謙彰	思春期・青年期の自閉症ス ペクトラム児の療育プログ ラムの開発(1) —イメ ージの共有による自主性・ 協同性を高める活動につい て—	2016年8月	自閉症スペクトラム学会第15回研究大 会	加納恵理子・松元佑・荒木穂積

94	竹内謙彰	思春期・青年期の自閉症スペクトラム児の療育プログラム開発(2) —リクレーション活動とソーシャル・スキル活動の統合を目指して—	2016年8月	自閉症スペクトラム学会第15回研究大会	小林里帆・津幡法胤・西川大輔・松元佑・荒木穂積
95	竹内謙彰	「三つの願い」の意味するもの：予備的調査研究—大学生における価値観との関連の検討—	2017年3月	日本発達心理学会第28回大会	
96	野田正人	暴力行為現象に向けたSSWの役割	2016年4月	大阪府スクールソーシャルワーカー連絡会	
97	野田正人	暴力行為への対応とSSWの役割	2016年4月	大阪府教育委員会小学校スクールソーシャルワーカー研修会	
98	野田正人	ソーシャルワークとアセスメントシートの活用	2016年5月	沖縄子どもの貧困対策支援研修	
99	野田正人	児童福祉の基礎知識と関係機関の連携	2016年7月	京都市教育委員会、学校でのソーシャルワーク実践研修「基礎2」	
100	野田正人	出会い直しの教育「教育と福祉の連携、子どもの貧困など」	2016年8月	開善塾教育相談実技研修会	
101	野田正人	教育相談体制の充実とスクールソーシャルワーカーへの期待	2016年8月	(一般社団)日本スクールカウセリング推進協議会 公開シンポジウム2016	
102	野田正人	子どもの育ちと家庭を支える学校	2016年8月	日本学校ソーシャルワーク学会第11回東京大会	
103	野田正人	教育相談の充実に向けた、まなび・生活アドバイザーの在り方	2016年10月	京都府学び・生活アドバイザー連絡協議会	
104	野田正人	虐待と非行との関連について	2016年10月	京都府心理判定員会議	
105	野田正人	教育相談と学校づくり チームで取り組む不登校支援	2016年10月	日本学校教育相談学会 第11回近畿・石川ブロック研究大会	近江兄弟社高校 安藤敦子(副校長) 野本実希(SSW)
106	櫻谷眞理子	児童養護施設退所者へのアフターケア —施設職員へのアンケート調査を基に—	2016年9月	日本生活指導学会第34回研究大会	
107	岡本尚子	助言者—学習者の関係における視線配分と助言の有効性	2016年5月	第34回日本生理心理学会大会	黒田恭史
108	岡本尚子	Influence of hints in the teaching-learning process: A neuroscientific study	2016年6月	European Association for Research on Learning and Instruction	Yasufumi Kuroda
109	岡本尚子	Changes in Brain Activity While Engaging in Number Sequence Questions of Varying Difficulty	2016年7月	13th International Congress on Mathematical Education	Yasufumi Kuroda
110	岡本尚子	教員養成と連動した不登校児童生徒のための算数・数学デジタルコンテンツの制作	2016年8月	日本教育学会第75回大会	黒田恭史, 原清治
111	岡本尚子	算数文章題解決過程における視線移動の特徴	2016年8月	教育システム情報学会第41回全国大会	黒田恭史, 前迫孝憲
112	岡本尚子	教員養成課程学生と非課程学生の除法筆算過程観察時の着目点の違い	2016年9月	数学教育学会秋季例会	黒田恭史, 野杖紗千
113	岡本尚子	What does development of brain activity measuring apparatus bring to educational research?	2016年11月	計測自動制御学会ライフエンジニアリング部門シンポジウム	Yasufumi Kuroda
114	岡本尚子	小学校教員養成の正課外行事における教職能力の育成	2016年11月	日本教育実践学会第19回研究会	
115	岡本尚子	Laterality Index plot of	2016年11月	Society for Neuroscience 2016	Hideo Eda, Madoka Yamazaki,

		NIRS data indicates the brain activation laterality for calculation test and for Kraepelin performance test			Yasufumi Kuroda
116	岡本尚子	Can we capture lateralization of brain activities with EEG and/or NIRS?	2016年11月	Society for Neuroscience 2016	Madoka Yamazaki, Hideo Eda, Yasufumi Kuroda
117	岡本尚子	図形の回転移動課題解決時における視線移動特徴	2017年2月	教育システム情報学会 2016年度学生研究発表会	西村綾夏, 鈴木麻希, 中谷公彦
118	岡本尚子	ヒント提示過程における助言者の視線移動特徴	2017年3月	数学教育学会 2017年度春季年会	黒田恭史
119	東山篤規	枠組みが2次元画像の奥行き感に及ぼす影響	2016年8月	日本視覚学会 2016年夏季大会	下野孝一, 木原健, Ono Hiroshi
120	東山篤規	Apparent depth in glass, bronze, and nickel mirrors: Color effects.	2016年8月	The 39th Annual Meeting of European Conference on Visual Perception	對梨成一
121	東山篤規	鏡映世界の距離と奥行: 反射材の効果	2016年11月	関西心理学会第128回大会	對梨成一
122	湯浅俊彦	「出版メディアとプリント・ディスプレイ」	2016年12月	日本出版学会 2016年度秋季研究発表会	
123	星野祐司	Word length effects on order memory in immediate and delayed Free-reconstruction Tasks	2016年7月	The 31st international congress of psychology	Toga, Y.
124	星野祐司	Recollection of positive autobiographical memory under negative mood: Individual differences in difficulty of recall.	2016年7月	The 31st international congress of psychology	
125	服部雅史	文字の非流暢性と記憶成績: 個人特製の検討	2016年6月	日本認知心理学会第14回大会	宮川法子
126	服部雅史	A benefit of “flagging inhibition” in insight problem solving	2016年7月	The 31st International Congress of Psychology	Nishida, Y., Orita, R.,
127	服部雅史	Malleability and durability of implicit attitude: The influence of approach and avoidance behavior	2016年7月	The 31st International Congress of Psychology	Orita, R,
128	服部雅史	Dual frames in causal reasoning and other types of thinking: An empirical test	2016年8月	The 8th International Conference on Thinking	Hattori, I.
129	服部雅史	見えない手がかりを意識的努力によって取捨選択できるか: 洞察問題解決における閾下プライミングを用いた検討	2016年10月	日本基礎心理学会第35回大会	西田勇樹・織田 涼
130	服部雅史	Paradoxical relationship between exogenous cues and endogenous activity in insight problem solving: The influence of two types of inhibitory controls.	2017年3月	The 2nd International Convention of Psychological Science	Orita, R., Nishida, Y.,
131	北岡明佳	色関係の錯視について	2016年6月	第41回日本香粧品学会	
132	北岡明佳	Visual phantoms and perceptual transparency	2016年7月	31st International Congress of Psychology (ICP2016)	
133	北岡明佳	The Bogart illusion inverted	2016年7月	31st International Congress of Psychology (ICP2016)	Tai, T.
134	北岡明佳	The role of eye characteristics in facial	2016年7月	31st International Congress of Psychology (ICP2016)	Mitsuhiro, K.

		beauty, likability and attractiveness			
135	北岡明佳	(2016). The role of blur in the motion illusion induced by the luminance gradient in stationary images. , Japan, July 27, 2016.	2016年7月	31st International Congress of Psychology (ICP2016)	Matsushita, S.
136	北岡明佳	Motion illusions in stationary images	2016年7月	31st International Congress of Psychology (ICP2016)	
137	北岡明佳	アイシャドーによる視線方向知覚の変位	2016年8月	日本視覚学会 2016年夏季大会	戴子堯
138	北岡明佳	RGBを原色とする減法混色の並置混色のアルゴリズムとその応用	2016年8月	日本視覚学会 2016年夏季大会	
139	北岡明佳	錯視のはなし	2016年8月	大津市科学館・科学講演会	
140	北岡明佳	錯視の不思議な世界によるこそ！	2016年9月	JAGDA Kanagawa トーク&セミナー	
141	北岡明佳	RGBを原色とする減法混色とCMYを原色とする加法混色	2016年9月	システム視覚科学研究センター・夏のワークショップ	
142	北岡明佳	錯視と視機能	2016年9月	第27回日本緑内障学会	
143	北岡明佳	ふしぎでおもしろい錯視の世界	2016年11月	豊川堂企画「本っていいじゃん！」	
144	北岡明佳	視線方向錯視の知覚における個人差の検討	2017年1月	日本視覚学会 2017年冬季大会	戴子堯
145	北岡明佳	錯視とだまし絵の仕組み	2017年2月	分科会講演会	
146	北岡明佳	錯視の話題	2017年2月	立命化友会特別企画セミナー	
147	北岡明佳	並置混色と錯視	2017年3月	第11回錯覚ワークショップ	
148	北岡明佳	錯視をシステム視覚科学にする試み	2017年3月	シンポジウム「錯視のシステム視覚科学」	
149	北岡明佳	色依存のフレーザー・ウィルコックス錯視の眼特異性	2017年3月	第50回知覚コロキウム準備委員会	
150	北岡明佳	シンポジウム "正しい知覚"と錯覚の境界で 指定討論 「恒常性と錯覚」	2017年3月	第50回知覚コロキウム	
151	廣井亮一	「法と家族臨床－司法臨床のアプローチ」	2016年9月	第33回日本家族研究・家族療法学会	中川利彦、河野聡、岡本潤子、河野聖子
152	廣井亮一	「質的研究における研究と実存の間－司法臨床の観点から」	2016年9月	第13回日本質的心理学会	
153	山本博樹	Possible support for first year high school students to use structure strategy while comprehending expository text: Processes of the signaling effect depending on their strategy use.	2016年7月	31st International Congress of Psychology (ICP2016)	
154	山本博樹	Literacy for healthy aging: The role of comprehending on a healthy-longevity life.	2016年7月	31st International Congress of Psychology (ICP2016)	H.Yshida, H.Kinjyo, Y.Wada, I.Noro, U.Scholz
155	山本博樹	Possible support for older adults to use structure strategy when comprehending instructions for medical emergency notification services.	2016年7月	31st International Congress of Psychology (ICP2016)	

156	山本博樹	高校初年次の理解不振を改善する「倫理」教科書のメタテキスト—前提要因による理解終盤での効果の調整—	2016年10月	日本教育心理学会第58回大会	織田涼
157	山本博樹	高校初年次生の理解不振に対する説明表現の有効性—支援モデルからみた効力観—	2016年10月	日本教育心理学会第58回大会	
158	山本博樹	学習支援としての説明は本当に有効なのか—説明研究の現在と今後への道標—	2016年10月	日本教育心理学会第58回大会	伊藤貴昭・吉田甫・佐藤浩一・小林寛子・湯澤正通
159	山本博樹	授業デザイナーに課された支援的説明の難題	2017年3月	立命館大学認知科学研究センター研究会	
160	宇都宮博	Development of the Inventory of Premarital Commitment (IPC): Factor structure, reliability, and validity	2016年7月	31st International Congress of Psychology	
161	宇都宮博	婚約期における結婚に対する態度とその背景(ラウンドテーブル企画責任・話題提供)(発表予定)	2017年3月	日本発達心理学会第28回大会	
162	岡本直子	What therapeutic meanings does touching paints (pigments) have in finger painting?	2016年7月	International Congress of Psychology 2016 (ICP 2016)	
163	三田村仰	自主シンポジウム4「臨床現場で行動指標を活用する—現場からの有効性・有用性の発信を目指して—」企画・司会:柳澤博紀(犬山病院)・瀬口篤史(犬山病院) シンポジスト:瀬口篤史・今野高志(東海中央病院)・首藤祐介(中京大学)・三田村仰(立命館大学) 指定討論:松見淳子(関西学院大学) 三田村仰「介入評価」における標的行動の迅速な決定	2016年10月	日本認知・行動療法学会第42回大会	
164	三田村仰	Tips 9 認知行動療法 - 「第3世代」の登場で何が変わったのか?	2016年12月	第21回日本心療内科学会総会・学術大会	
165	吉沅洪	英国・中国・日本の学生の心理的問題、そのアセスメントと支援について	2016年7月	和洋女子大学国際シンポジウム	
166	吉沅洪	Chinese college students suicide problem and support	2016年7月	The 31st International Congress of Psychology	
167	吉沅洪	動的家族画からみるトラウマ表現	2016年9月	The First (2016) International Conference of Science & Technology on Psychotherapy and Counseling	
168	吉沅洪	日中比較からみる災害後心のケアにおける共感疲労—支援者支援と文化	2016年11月	第8回アジア災害後心理援助国際シンポジウム	
169	立岩真也	一つのための幾つか	2016年12月	第36回びわこ学園実践研究発表会全体講演	
170	森久智江	地域生活定着支援センター全国調査にみる犯罪をした人の社会復帰支援の現状と課題	2016年8月	日本司法福祉学会第17回大会	水藤昌彦、木下大生
171	森久智江	日本における司法福祉の現状	2016年8月	日韓社会内処遇セミナー	
172	森久智江	テクノロジーを用いた社会内モニタリング—オースト	2016年9月	社会内処遇と司法福祉セミナー	

		ラリアにおける監視社会の拡大と障がいのある人の自律的な社会復帰のあり方から考える一			
173	森久智江	オーストラリア NSW 州における矯正医療	2016 年 9 月	矯正医療研究会	
174	森久智江	司法と福祉の連携における犯罪行為者の自律的な社会復帰のあり方	2016 年 10 月	2016 年度第 1 回刑事法研究会	
175	森久智江	刑事司法の「自己像」と「孤立」	2016 年 10 月	日本犯罪学会第 43 回大会シンポジウム「刑事司法と対人援助——誰のために、何を——」	
176	森久智江	犯罪からの社会復帰に必要なものを考える。一オーストラリアの場合	2016 年 12 月	立命館大学人間科学研究所年次総会『対人援助の新展開：理論・方法・制度の視点から』シンポジウム 1「犯罪からの社会復帰に必要なものを考える：法と対人援助の視点から」	
177	森久智江	「修復的司法」観の再検討・序論	2016 年 12 月	R-GIRO「修復的司法観による少年高齢化社会に寄り添う法・社会システムの再構築」第 6 回修復的司法セミナー	
178	森久智江	「修復的司法」と「治療的司法」の対話—RJ から、近くて遠い他人の TJ へ	2017 年 2 月	第 9 回治療的司法研究会	
179	森久智江	Overview of Japanese Medical Care in Criminal Justice System	2017 年 2 月	JH&FMHN Meeting	
180	森久智江	少年審判の流れ—少年法って何のためにあるの？	2017 年 3 月	2016 年度よりそい専門研修会開催ご案内「司法と福祉の架け橋をめざして！」	
181	森久智江	犯罪をした人とその家族に対する当事者支援の現状	2017 年 3 月	島根あさひ社会復帰促進センターTC ユニット講話	
182	北出慶子	Should I have chosen an English speaking country, instead? Re-evaluating Japanese students' study abroad experiences	2016 年 6 月	International Society for Language Studies	
183	北出慶子	「何が語られたか」と「どのように語られたか」—複数回に渡る語りの解釈—	2016 年 9 月	日本質的心理学会年次大会	
184	北出慶子	「英語圏に留学すべきだったのか？」—就職活動を通じた韓国・中国留学経験の再評価—	2017 年 2 月	言語文化教育研究学会	
185	北出慶子	英語基準留学生 (International students in English as medium of Instruction program) の日本語学習動機—事例研究報告	2017 年 3 月	英語基準留学生の日本語教育を考える	
186	藤本学	フォーラムシアターによる不定就労者のスキルトレーニングの効果性の検証 — 自閉症傾向と理不尽受容スキルに基づく分類—	2016 年 9 月	パーソナリティ学会 第 25 回大会	
187	山浦一保	Why we forgive our valuable partners: Rational calculation, emotional adaptation, or a mixture of both?	2016 年 6 月	The 28th annual conference of the Human Behavior and Evolution Society	Smith, A., Yagi, A., Shimizu, H., McCullough, M. E., & Ohtsubo, Y.
188	山浦一保	Effective leadership behavior to recover collective efficacy after a devastating loss.	2016 年 7 月	The 31st International Congress of Psychology	Endo, Y.
189	山浦一保	What does the Inamori Management Philosophy bring?	2016 年 12 月	Ritsumeikan Inamori Philosophy Research Center The 2nd International Symposium. Japan:	Sato, T., & Kono, T.

				Osaki (OIC).	
190	山浦一保	チームマネジメントによる 妬み緩和条件の検討	2017年3月	京都滋賀体育学会第146回大会	荒木貴仁
191	堀江未来	Students' Attitudes Towards English-Medium Courses: A Japanese Context.	2016年6月	The 14th Asia TEFL International Conference	Emiko Yukawa
192	堀江未来	Top Global University Project: Japan's Internationalization Strategy	2016年11月	QS·APPLE Annual Conference	
193	山口洋典	Unlearn the Systematic Curriculum in Service Learning: beyond Counterproductivity through Longterm Collaboration in the Community	2016年9月	International Association for Research on Service-Learning & Community Engagement (IARSLCE) 2016 Conference	Toru Kawai
194	山口洋典	共感不可能性を前提とした 被災地間支援の方法論に関 する予備的考察～熊本を事 例に～	2016年10月	日本災害復興学会2016	関嘉寛
195	山口洋典	被災地の定点観測におけ る学習と活動の相即への 身構え：参加型学習を通 じた災害経験の伝承に関 する実践的研究(3)	2016年10月	日本グループ・ダイナミクス学会第 63回大会	高森順子
196	山口洋典	ボランティア学と私：神戸 から世界へ	2017年2月	国際ボランティア学会第18回大会	竹端寛・桑名恵・吉村恵・宮本匠
197	由井秀樹	戦後日本の身上相談にみる 不妊事例	2016年9月	第26回日本家族社会学会大会	
198	澤野美智子	Roles of Feeding in Culture of Japanese Companies	2016年10月	East Asian Anthropological Association 2016 Meeting in Sapporo "Culture, For or Against?: Thirty Years after "Writing Culture"	
199	澤野美智子	Cultural Anthropology/Psychology: Corporate History/Archiving Project(Interim Presentation of Research)	2016年12月	The 2nd International Symposium of Ritsumeikan Inamori Philosophy Research Center	Tatsuya Sato
200	澤野美智子	共食が生み出される場： 韓国農村の「敬老堂」の事 例から	2017年2月	国際シンポジウム「エイジフレンドリ ー コミュニティ——変わりゆく人生 を包みこむまち」	
201	相澤育郎	フランスにおける刑罰適用 裁判官の生成と展開：刑の 司法化、裁判化と個別化	2016年9月	日本刑法学会九州部会第119回例会	
202	相澤育郎	日本の犯罪者処遇をめぐる 諸問題：自己紹介を兼ねて	2016年10月	第1回修復的司法セミナー	
203	相澤育郎	Medical Problem in Prison: Comparative Approach between Japan and France	2016年10月	10th East Asian Association of Psychology and Law Conference in Korea	
204	相澤育郎	犯罪からの社会復帰に必要 なものを考える：フランス の法と制度から	2016年12月	立命館大学人間科学研究所年次総会 (共催シンポジウム第1部)「犯罪から の社会復帰に必要なものを考える：法 と対人援助の視点から」	
205	相澤育郎	矯正医療における医療倫理 的課題：欧州の基準とフラ ンスの実務	2016年12月	刑事立法研究会矯正医療研究班	
206	相澤育郎	Raymond SALEILLES, L'individualisation de la peine: Étude de criminalité social, Paris:	2016年12月	刑法読書会年末集中例会(第557回)	

		F. Alcan, 1898, 1908, 1927; Erès, 2001.			
207	相澤育郎	フランスにおける社会内処遇 milieu ouvert・プロバシオン probation の生成と変貌：JAP と SPIP	2017年3月	刑事立法研究会社会内処遇班	
208	對梨成一	Apparent depth in glass, bronze, and nickel mirrors: Color effects	2016年8月	39th European Conference on Visual Perception (ECP)	Higashiyama, A.
209	對梨成一	鏡映世界の距離と奥行き：反射材の効果	2016年11月	関西心理学会	東山篤規
210	對梨成一	教育人間学に適した知覚心理学研究について	2016年11月	第10回教育人間学会	
211	田村昌彦	モンティ・ホール問題における選択変更確率の強度についての検討	2016年9月	日本認知科学会第33回大会	
212	田村昌彦	身体性を有するエージェントとのコミュニケーションにおける言語選択	2017年1月	電子情報通信学会ヒューマンコミュニケーション基礎(HCS)2017年1月研究会	星田雅弘・林勇吾
213	土田菜穂	「キャリア支援としての大学内模擬店舗での就労実習・学生ジョブコーチによる『できる』の拡大に向けた支援」	2016年	日本特殊教育学会第54回年次大会	中鹿直樹・望月昭
214	土田菜穂	「特別支援学校教員における子どもの行動の見立ての変容に関する予備的研究-行動コンサルテーションを通して-」	2016年	対人援助学会第8回年次大会	中鹿直樹
215	都賀美有紀	Word length effects on order memory in immediate and delayed free-reconstruction tasks	2016年7月	The 31st International Congress of Psychology	Hoshino, Y

4. 主催したシンポジウム・研究会等					
No.	発表会議名	開催場所	発表年月	来場者数	共催機関名
1.	キテ・ミテ中之島 2016] 連携イベント 絵本の読み聞かせ一笑顔の花を咲かせよう♪	京阪電車 なにわ駅 アートエリア B1	2016年5月22日	50	主催：京阪電気鉄道株式会社／中之島高速鉄道株式会社 共催：立命館大学人間科学研究所「絵本プロジェクト」／アートエリア B1
2.	研究会「自閉スペクトラム症の青年・成人の課題と支援」	衣笠キャンパス 創思館 303・304	2016年8月10日	30	主催：立命館大学人間科学研究所(療育プログラム開発プロジェクト)
3.	第1回総合心理学セミナー「文化心理学の新展開 デンマーク・オールボー大学ヴァルシナー教授を迎えて」	大阪いばらきキャンパス立命館いばらきフューチャープラザ374コロキウム	2016年7月22日	100	主催：立命館大学総合心理学部 共催：R-GIRO「学融的な人間科学の構築と科学的根拠に基づく対人援助の再編成」／JSPS 科研費 16K04324／立命館大学人間科学研究所「応用社会心理学のさらに新しいかたち」
4.	研究会「新生児の養子縁組 ～今、なにを議論するの～」	朱雀キャンパス 316	2016年9月2日	30	主催：立命館大学人間科学研究所「家族形成をめぐる対人援助プロジェクト」
5.	第1回 人口と生殖の歴史研究会	キャンパスプラザ 京都 第一会議室	2016年8月6日	30	共催：JSPS 科研費 16K01171／立命館大学人間科学研究所「家族形成をめぐる対人援助プロジェクト」／出生をめぐる倫理研究会／立命館大学生存学研究センター
6.	シンポジウム「創造性と自己表現 その光と影—教育・支援のありかたといじめ問題—」	大阪いばらきキャンパス立命館いばらきフューチャープラザ カンファレンスホール	2016年9月22日	50	主催：R-GIRO「学融的な人間科学の構築と科学的根拠に基づく対人援助の再編成」 共催：立命館大学人間科学研究所「学融的な人間科学の構築プロジェクト」
7.	笑顔の花を咲かせたい—復興地、心の支援へ2つのプログラム—(木村洋介氏 写真展・太鼓集団「大地の会」と絵本の読み聞かせのコラボレーション)	国際平和ミュージアム 中野記念ホール	2016年9月14日～9月25日	100	主催：立命館大学人間科学研究所「絵本プロジェクト」
8.	法と心理学会 第17回大会	大阪いばらきキャンパス 374コロ	2016年10月15日～	100	主催：法と心理学会 共催：立命館大学人間科学研究所／立命館大学総合心理

		キウムほか	16日		学部/R-GIRO「修復的司法観による少子高齢化社会に寄り添う法・社会システムの再構築」
9.	公開シンポジウム「対人援助の新展開：理論・方法・制度の視点から」（兼 2016年度人間科学研究所年次総会）	大阪いばらきキャンパス C273 教室ほか	2016年12月3日	80	共催：立命館大学人間科学研究所/R-GIRO「学融的な人間科学の構築と科学的根拠に基づく対人援助の再編成」/R-GIRO「修復的司法観による少子高齢化社会に寄り添う法・社会システムの再構築」
10.	シンポジウム「男性と生殖、セクシュアリティ」	朱雀キャンパス 308 教室	2017年1月22日	30	主催：JSPS 科研費 15K21496 共催：立命館大学人間科学研究所「家族形成をめぐる対人援助プロジェクト」
11.	研究ワークショップ「規範理論におけるサーヴェイ実験の行方」	大阪いばらきキャンパス AN411	2016年12月17日	30	主催：立命館大学人間科学研究所「ナッジ研究プロジェクト」 共催：JSPS 科研費 15K02022
12.	第5回「精神分析と倫理」研究会-現代的 精神病理の展望：「サントーム」をめぐる て	衣笠キャンパス 洋館第3研究会 室	2017年2月 4日	30	主催：JSPS 科研費 15K16614 共催：立命館大学生存学研究中心/立命館大学人間 科学研究所
13.	講演会「中高年の発達一加齢とともに向上・維持する能力の発掘」	衣笠キャンパス 末川記念会館 講 義室	2017年2月 27日	200	主催：立命館大学人間科学研究所
14.	ユースワーカー養成公開研究会「若者支援 におけるユースワークの価値を考える」	京都市中京青少年 活動センター	2017年3月 25日	50	共催：公益財団法人京都市ユースサービス協会/立命館 大学人間科学研究所
15.	男性介護者と支援者の全国ネットワーク 発足8周年記念イベント「ケアのコミュニ ティを広げる」	京都タワーホテル 9階 飛雲の間/ 衣笠キャンパス 末川記念会館 講 義室	2017年3月 11日～12 日	200	主催：男性介護者と支援者の全国ネットワーク/立命館 大学人間科学研究所 男性介護研究会

5. その他研究活動（報道発表や講演会等）				
No.	氏名	研究業績名	発表場所等	研究期間
1	松原洋子	シリーズ 障害のある女性 第2回 本当は産みたかった 一強制不妊手術・54年目の証言（スタジオ出演）	NHK(ETV)、ハートネットTV	2016年7月6日 ～2016年7月6日
2	松原洋子	「(相模原事件が投げかけるもの： 下)「優生」消えても、残る偏見」 におけるコメント	朝日新聞朝刊	2016年8月26日 ～2016年8月26日
3	松原洋子	変革のリーダーシップ:ダイバーシ ティから生まれるイノベーション (モデレーター)	平成28年度科学技術人材育成費補助事業「ダイ バーシティ研究環境実現イニシアティブ(特色 型)」採択記念事業、立命館大学衣笠キャンパス	2016年10月19日 ～2016年10月19日
4	松原洋子	優生思想の歴史と現在	第2回認定遺伝カウンセラーアドバンス研修 会, AP 品川	2016年10月29日 ～2016年10月29日
5	松原洋子	フォーラム：障害者・本・図書館員 をつなぐ図書館づくりのためにII	第18回図書館総合展、パシフィコ横浜	2016年11月9日 ～2016年11月9日
6	松原洋子	優生政策と医療・福祉	湖北小児神経懇話会特別講演会、長浜市、湖北 医療サポートセンター	2017年2月26日 ～2017年2月26日
7	サトウツヤ	質的分析アナリスト育成プログラムの 作成		2016年4月1日 ～2017年3月31日
8	サトウツヤ	釜石の奇跡～危機状況で生きる普段 からの準備とは～	京都府危険物安全大会	2016年6月10日 ～2016年6月10日
9	サトウツヤ	東日本大震災と心理学：人生径路の 問題	立命館大学梅田キャンパス	2017年1月18日～
10	サトウツヤ	質的研究とは何か	日本心理学会若手の会 異分野間協働懇話会	2017年3月7日 ～2017年3月7日
11	安田裕子	日本学術振興会特別研究員申請 申 請内容ファイル作成のポイント（講 習会）	茨木市・立命館大学、2018年度 日本学術振興 会特別研究員申請ガイダンス	2016年4月3日 ～2016年4月5日
12	安田裕子	日本学術振興会特別研究員申請 申 請内容ファイル作成のポイント（講 習会）	草津市・立命館大学、2017年度 日本学術振興 会特別研究員申請ガイダンス	2016年4月4日 ～2016年4月4日
13	安田裕子	日本学術振興会特別研究員申請 申 請内容ファイル作成のポイント（講 習会）	京都市・立命館大学、2017年度 日本学術振興 会特別研究員申請ガイダンス	2016年4月5日 ～2016年4月5日
14	安田裕子	講演「トラウマとしての虐待被害と 心理ケア」/演習「急性期の介入・ 支援での連携について」/演習「長	立命館大学大阪いばらきキャンパス C272・271 ラーニングスタジオ、「多専門連携による司法面 接の実施を促進する研修プログラムの開発と実	2016年10月30日 ～2016年10月30日

		期的な支援での連携について」(実務家研修)	装」(研究代表者:仲真紀子)主催 子どもと関わる実務家のための研修「虐待を受けた子どもへの支援:被害確認と心身のケア-多職種専門家における効果的な連携の在り方について」	
15	安田裕子	家庭は子どもの安全基地(上)(記事)	聖教新聞	2017年1月15日 ~2017年1月15日
16	安田裕子	家庭は子どもの安全基地(下)(記事)	聖教新聞	2017年1月22日 ~2017年1月22日
17	安田裕子	「子どものライフとその支援-生きる力を育もう」(研修会)	大阪市教育センター、大阪市教育センター主催 EC研修会(教育センター研修会)	2017年2月21日 ~2017年2月21日
18	安田裕子	TEA(複線径路等至性アプローチ)(講演とデータ分析実習)	東京都文京区・東京大学本郷キャンパス赤門総合研究棟2階200・208、日本質的心理学会研究交流委員会主催 対話する方法論:TEA(複線径路等至性アプローチ)×IPA(解釈学的現象学的分析)	2017年3月20日 ~2017年3月20日
19	増田梨花	ブロッサムセミナーin 京都 平成28年度 第1回	立命館大学 究論館	2016年4月3日 ~2016年4月3日
20	増田梨花	ブロッサムセミナーin 東京 平成28年度 第2回		2016年4月23日 ~2016年4月23日
21	増田梨花	童謡で日本を旅しましょう!	金沢市蓄音器館	2016年4月29日 ~2016年4月29日
22	増田梨花	総合的な学習の時間「こころ」ピアサポート(教職員研修)	京都府立清明高等学校	2016年5月10日 ~2016年5月10日
23	増田梨花	総合的な学習の時間「こころ」ピアサポート(生徒向け講座)	京都府立清明高等学校	2016年5月18日 ~2016年5月18日
24	増田梨花	キテ・ミテ中之島2016 絵本の読み聞かせ〜笑顔の花を咲かせよう♪〜	アートエリア B1(なにわ橋駅下車)	2016年5月22日 ~2016年5月22日
25	増田梨花	カウンセリング研修	立命館大学朱雀キャンパス	2016年6月4日 ~2016年6月4日
26	増田梨花	ブロッサムセミナーin 京都 平成28年度 第2回		2016年6月4日 ~2016年6月5日
27	増田梨花	岐阜県民保育園連盟主催「第8回保育セミナー」	大垣フォーラムホテル	2016年6月11日 ~2016年6月11日
28	増田梨花	ブロッサムセミナーin 東京 平成28年度 第3回		2016年6月12日 ~2016年6月12日
29	増田梨花	ブロッサムセミナーin 東京 平成28年度 第4回		2016年8月21日 ~2016年8月21日
30	増田梨花	ブロッサムセミナーin 京都 平成28年度 第3回		2016年8月28日 ~2016年8月28日
31	増田梨花	ぱちぱち絵本教室	金沢市教育プラザ富樫131研究室	2016年9月2日 ~2016年9月2日
32	増田梨花	金沢市蓄音器館講演会 講師:増田梨花	金沢蓄音器館	2016年9月2日 ~2016年9月2日
33	増田梨花	障害児の感覚絵本で豊かに(9月3日読売新聞掲載記事)	金沢親子読み聞かせ教室	2016年9月3日 ~2016年9月3日
34	増田梨花	障害ある子ども絵本を 金沢で読み聞かせ講座(9月3日北陸中日新聞掲載記事)	金沢読み聞かせ教室	2016年9月3日 ~2016年9月3日
35	増田梨花	笑顔の花を咲かせたい(復興地、心の支援へ2つのプログラム)月明かりに照らされて・大地の力を響かせて	立命館大学国際平和ミュージアム中野記念ホール	2016年9月14日 ~2016年9月24日
36	増田梨花	ブロッサムセミナーin 京都 平成28年度 第4回		2016年10月22日 ~2016年10月22日
37	増田梨花	人と人をつなぐ絵本の活用	滋賀文教短気大学	2016年10月30日 ~2016年10月30日
38	増田梨花	第4回醍醐寺ファミリーフェス	醍醐寺	2016年11月3日 ~2016年11月3日
39	増田梨花	ブロッサムセミナーin 東京 平成28年度 第5回		2016年11月12日 ~2016年11月12日
40	増田梨花	ブロッサムセミナーin 京都 平成28年度 第5回		2016年12月11日 ~2016年12月11日
41	増田梨花	ブロッサムセミナーin 東京 平成28年度 第6回		2016年12月11日 ~2016年12月11日

42	増田梨花	ブロッサムセミナーin 東京 平成 28年度 第7回		2016年12月25日 ～2016年12月25日
43	増田梨花	ピア・サポートを活かしたコミュニ ケーションを体験しましょう	金沢福祉専門学校	2017年2月8日 ～2017年2月8日
44	増田梨花	みんなで歌えば寒くない？	金沢市蓄音器館	2017年2月9日 ～2017年2月9日
45	増田梨花	ブロッサムセミナーin 東京 平成 29年度 第8回		2017年2月26日 ～2017年2月26日
46	増田梨花	ブロッサムセミナーin 京都 平成 29年度 第6回		2017年3月20日 ～2017年3月20日
47	村本邦子	京都新聞現代の言葉「ハワイアン主 権回復運動に学ぶ」	京都新聞	2016年4月22日～
48	村本邦子	京都新聞現代の言葉「被災地をつな ぐ」	京都新聞夕刊	2016年6月20日～
49	村本邦子	「性暴力被害女性が支援団体：苦し み抜け出せる」コメント	南日本新聞	2017年1月30日～
50	稲葉光行	青山正さんを救援する関西市民の会 講演会「えん罪救済センターの活動 について」	青山正さんを救援する関西市民の会講演会	2016年7月28日 ～2016年7月28日
51	稲葉光行	第60期京都市人権文化講座「日本に おけるえん罪救済の取組み～えん罪 救済センターの現状と課題」	第60期京都市人権文化講座	2016年12月9日 ～2016年12月9日
52	野田正人	子育てを楽しくする方法はある？	京都府伊根中学校PTA研修会	2016年4月23日～
53	野田正人	全戸訪問事業の法的根拠と意義につ いて	大津っ子みんなで育て愛 全戸訪問事業研修会 大津市明日都浜大津	2016年5月18日～
54	野田正人	不登校児童生徒への支援に関する、 まなび生活アドバイザーのあり方	京都府教育委員会主催、まなび生活アドバイザ ー連絡協議会 ルビノ堀川	2016年5月19日～
55	野田正人	児童虐待への対応	滋賀県児童虐待相談等担当職員（管理監督者・ 実務者）研修 於滋賀県庁	2016年7月14日～
56	野田正人	子どもの貧困問題について	京都府高等学校人権教育研究会丹後ブロック研 究会 於中丹勤労福祉会館（福知山）	2016年8月2日～
57	野田正人	「チーム学校」を機能させるための 副校長・教頭の役割	平成28年度山城地方小・中学校副校長・教頭研 修会 京都府総合教育センター	2016年8月26日～
58	野田正人	平成28年度三重県児童相談センタ ー 児童福祉に関する指定講習会講 師「要保護児童対策地域協議会運営 論」「市町村児童家庭相談援助論」	三重県津庁舎	2016年8月29日～
59	野田正人	児童福祉論－児童福祉法の現状－	平成28年度市町村等児童福祉専門職員育成研修	2016年9月2日～
60	野田正人	いじめ問題について	近畿弁護士連合会子どもの権利委員会夏期研修 会 大津市ピアザ淡海	2016年9月2日～
61	野田正人	BBS 活動の意義	京都・兵庫 BBS 連盟合同研修会 立命館大学衣 笠キャンパス	2016年9月3日～
62	野田正人	非行少年に対する学校の役割	大阪府社会福祉士会2016年度スクールソーシ ャルワーカー実践連続講座 大阪人間科学大学	2016年9月17日～
63	野田正人	児童虐待防止と学校の役割	伊賀市生徒指導総合連携会議 伊賀市教育研究 センター	2016年10月7日～
64	野田正人	児童虐待防止と児童委員の役割	三重県南勢志摩ブロック主任児童委員研修会 伊勢市伊勢トピア研修室	2016年10月13日～
65	野田正人	子どもたちの非行や犯罪とその背景	京都から国連子どもの権利委員会への代替報告 書をつくる会 京都教育文化センター	2016年11月12日～
66	野田正人	子ども家庭分野で働く社会福祉士に 求められる役割	滋賀県社会福祉士会子ども家庭支援委員会研修 会 於守山市平和堂	2016年12月6日～
67	野田正人	新たな不登校を生まないために「保 護者との連携の在り方」	津市小学校生徒指導連絡協議会 サン・ワーク 津	2017年2月2日～
68	野田正人	児童虐待への対応	松阪市公立保育園長会議 松阪市子ども支援研 究センター	2017年2月2日～
69	野田正人	子どもの人権を考える	大津市ピアザ淡海 滋賀県政策研修センター 滋賀県職員課長補佐級人権研修	2017年2月6日～
70	野田正人	「今求められるスクールソーシャル ワークとは」	岐阜県社会福祉士会子ども家庭福祉委員会学習 会 岐阜聖徳大学	2017年3月18日～
71	大谷いづみ	「社会に広がる「迷惑視」意識」	京都新聞 朝刊	2017年2月25日～

72	岡本直子	TFT (思考場療法) アルゴリズムレベル (初級) セミナー ファシリテーター	株式会社リリオール	2016年4月16日 ～2016年4月17日
73	岡本直子	TFT (思考場療法) 診断レベル (中級) セミナー ファシリテーター	立命館大学大阪茨木キャンパス	2016年7月30日 ～2016年7月31日
74	岡本直子	青少年のための「国際支援」セミナー ファシリテーター (国連世界人道支援機構・一般社団法人日本TFT協会共催)	国立オリンピック記念青少年総合センター	2016年9月22日 ～2016年9月22日
75	岡本直子	TFT (思考場療法) 上級レベルセミナー ファシリテーター	立命館大学大阪茨木キャンパス	2016年10月8日 ～2016年10月10日
76	岡本直子	TFT (思考場療法) 体験セミナー 講師	立命館大学衣笠キャンパス	2016年11月26日 ～2016年11月26日
77	岡本直子	TFT (思考場療法) アルゴリズムレベル (初級) セミナー ファシリテーター	国立オリンピック記念青少年総合センター	2017年1月14日 ～2017年1月15日
78	岡本直子	TFT (思考場療法) アルゴリズムレベル (初級) セミナー講師	立命館大学大阪茨木キャンパス	2017年2月25日 ～2017年2月26日
79	山浦一保	第10回 YMHS スポーツ・チャレンジャーズ・ミーティング	スポーツ討論会「(さらなるレベルに向かう) チャレンジする心の持ち方、高め方」	2017年3月3日 ～2017年3月3日
80	山浦一保	運営委員リレー連載「“平和”の教育と組織心理学」	立命館大学 国際平和ミュージアムだより Vol.24-3, pp7-8.	2017年3月4日～
81	澤野美智子	シンポジウム「医療人類学に取ってナラティブとは何か?」共同企画・司会	京都大学人文科学研究所 4F 大会議室	2017年2月4日 ～2017年2月4日

6. 受賞学術賞					
No.	氏名	授与機関名	受賞名	タイトル	受賞年月
1	由井秀樹	日本科学史学会	日本科学史学会学術奨励賞	『人工授精の近代―戦後の「家族」と医療・技術』	2016年5月
2	中尾麻伊香	日本科学史学会	日本科学史学会学術奨励賞	「放射能の探求から原子力の解放まで：戦前日本のポピュラーサイエンス」	2016年5月
3	神崎真実	日本質的心理学会	優秀フィールド論文賞	「通学型の通信制高校において教員は生徒指導をどのように成り立たせているのか―重要な場としての職員室に着目して」	2016年9月
4	東山篤規	Annals of Improbable Research	イグノーベル賞知覚賞	for investigating whether things look different when you bend over and view them between your legs	2016年9月
5	西田勇樹	関西心理学会	研究奨励賞	「遠隔連想課題における潜在の手がかりと認知抑制」	2016年11月
6	吉田一史美	日本生命倫理学会	若手論文奨励賞	1950年代の日本における乳児の人体実験	2016年12月
7	矢藤優子	日本発達心理学会	JSDP Award: Keynote for The British Psychological Society, Developmental Section & Social Section Annual Conference	Interaction Rating Scale: Evaluating caregiver-child relationships through observable behaviours.	2016年9月
8	サトウタツヤ	日本質的心理学会	日本質的心理学会優秀フィールド論文賞		2016年9月
9	村本邦子	日本コミュニティ心理学会	日本コミュニティ心理学会第19回大会優秀発表賞	コミュニティのなかで育つ対人援助職者	2016年6月
10	林勇吾	KDDI 財団	KDDI 財団審査委員奨励賞	「協同の学習支援活動を支援する対話エージェント」	2017年3月
11	藤本学	日本パーソナリティ心理学会	第24回大会(2015)優秀大会発表賞	社会に適応するために必要な SWITCH―ホームレスの実体験に基づく社会的スキル尺度の開発―	2016年9月
12	山浦一保	京都滋賀体育学会	京都滋賀体育学会第146回大会 若手研究最優秀奨励賞	チームマネジメントによる妬み緩和条件の検討	2017年3月

7. 科学研究費助成事業

No.	氏名	研究課題	研究種目	開始年月	終了年月	役割
1	松原洋子	戦後日本の人工妊娠中絶の制度史：医療・人口・地政学	基盤研究(C)	2016年4月	2019年3月	代表
2	松田亮三	変動する社会における社会保障公私ミックスの変容—量質混合方法論による接近	基盤研究(B)	2014年4月	2018年3月	代表
3	中村正	親密な関係における暴力加害者の特徴と暴力から離脱する過程の臨床社会学的研究	基盤研究(C)	2015年4月	2018年3月	代表
4	サトウタツヤ	グローバリゼーション時代における新しい心理学史の叙述	挑戦的萌芽研究	2015年4月	2018年3月	代表
5	安田裕子	人の生の潜在性と可能性に接近するTEA—文化をとらえ、分岐をつくる	基盤研究(C)	2016年4月	2019年3月	代表
6	若林宏輔	裁判員裁判評議を想定した集団討議実験と大型模擬裁判による比較の試み	若手研究(B)	2016年4月	2019年3月	代表
7	増田梨花	生理指標を用いた絵本とJAZZのコラボレーションにおける臨床心理学的介入の検討	挑戦的萌芽研究	2016年4月	2018年3月	代表
8	村本邦子	レジリエンスを引き出す災害後のコミュニティ支援モデルの構築	基盤研究(C)	2016年4月	2019年3月	代表
9	美馬達哉	直流刺激と歩行運動のハイブリッド型リハによる下肢機能再建とその脳内機構の解明	基盤研究(B)	2015年4月	2019年3月	代表
10	美馬達哉	発振操作による動的ネットワークの再組織化	新学術領域研究	2015年6月	2020年3月	代表
11	美馬達哉	「老成学」の基盤構築—く媒介的共助>による持続可能社会をめざして	基盤研究(B)	2015年7月	2019年3月	分担
12	井上彰	カタストロフィの分配的正義論	基盤研究(C)	2015年4月	2018年3月	代表
13	稲葉光行	メタバースを用いた日本の伝統文化及び生活文化の状況学習支援環境に関する総合的研究	基盤研究(B)	2015年4月	2020年3月	代表
14	小澤亘	デジタル図書によるトランスナショナルな外国人児童学習支援ネットワーク構築の研究	基盤研究(C)	2016年4月	2019年3月	代表
15	津止正敏	ケア包摂型コミュニティのダイナミズムと開発主体アソシエーションに関する臨床研究	基盤研究(C)	2016年4月	2019年3月	代表
16	大谷いづみ	生命倫理学・死生学における安楽死・尊厳死論の変容とキリスト教の歴史的社会的影響	基盤研究(C)	2015年4月	2018年3月	代表
17	斎藤真緒	虐待・介護殺人予防としての男性介護者のピア・サポート活動の可能性と課題	基盤研究(C)	2016年4月	2019年3月	代表
18	岡本尚子	教授—学習活動における視線移動特性の解明	若手研究(A)	2014年4月	2017年3月	代表
19	岡本尚子	助言が学習者に及ぼす情意的影響の生理学的分析	挑戦的萌芽研究	2016年4月	2019年3月	代表
20	東山篤規	視空間と触空間における直線の平行性と収斂性：ユークリッド空間説の検討	基盤研究(B)	2015年4月	2020年3月	代表
21	服部雅史	創造的認知の潜在性と意識的コントロール	基盤研究(B)	2015年4月	2020年3月	代表
22	北岡明佳	錯視の多面的研究—実験心理学・脳機能画像・数理解析・生物学の手法を用いて—	基盤研究(A)	2015年4月	2019年3月	代表
23	宇都宮博	成人初期における結婚生活に対するコミットメントの変容過程に関する研究	基盤研究(C)	2013年4月	2017年3月	代表
24	中鹿直樹	障害者のキャリア支援のためのポートフォリオとそれを拡充する実習場面の機能分析	基盤研究(C)	2015年4月	2018年3月	代表
25	林勇吾	協同学習におけるエージェントベースのリフレクションに関する総合的検討	基盤研究(C)	2016年4月	2019年3月	代表
26	松本克美	修復的正義の観点からの<損害の可視化>を実現するための損害論の法心理学的再構築	基盤研究(C)	2016年10月	2019年3月	代表
27	森久智江	刑事司法における再犯リスク概念の明確化と評価方法の適正化に関する比較法的	基盤研究(C)	2014年4月	2017年3月	代表

		研究				
28	北出慶子	日中韓の新型留学プログラムにおける言語文化教育の在り方と支援方法の提案	基盤研究(C)	2016年4月	2019年3月	代表
29	藤本学	応用演劇に基づくホームレスの就労自立支援に関する社会心理学的研究	挑戦的萌芽研究	2014年4月	2017年3月	代表
30	堀江未来	東アジア高等教育におけるグローバル人材像と国際教育展開	基盤研究(C)	2014年4月	2017年3月	代表
31	山口洋典	インター・コミュニティ・デザインとしての災害復興支援に関する実践的研究	若手研究(B)	2014年4月	2018年3月	代表
32	斎藤進也	立方体型情報ビューアによる視覚的データ管理手法の構築	基盤研究(C)	2015年4月	2018年3月	代表
33	早川岳人	「医療情報の高度利用による健康寿命予測推定モデルの構築と健康寿命の推計に関する研究」	基盤研究(C)	2015年4月	2019年3月	代表
34	由井秀樹	戦後日本の男性不妊と男性性に関する歴史研究	若手研究(B)	2015年4月	2017年3月	代表
35	吉田一史美	望まない妊娠への法的支援に関する日本・ヨーロッパ・アメリカの比較的研究	基盤研究(C)	2015年4月	2018年3月	分担
36	吉田一史美	米国における障害児の養子縁組の制度化に関する理論的研究	若手研究(B)	2016年4月	2018年3月	代表
37	中尾麻伊香	放射線被ばくに関する科学知識の生成と流通—1950年代から60年代の日本を中心に	若手研究(B)	2015年4月	2019年3月	代表
38	金成恩	生殖補助医療の法制度化による子の利益保護と家族形成の支援	若手研究(B)	2016年4月	2019年3月	代表
39	平岡義博	科学的証拠の信頼性評価法と標準鑑定法の確立に向けて	基盤研究(C)	2017年4月	2020年3月	代表
40	矢藤優子	生理指標を用いた親子の社会的関係性に関する縦断的研究:胎児期から幼児期にかけて	基盤研究(C)	2017年4月	2020年3月	代表
41	吉沅洪	障がい者きょうだいの援助ニーズと期待するサービスの変化—日中台援助モデルの構築—	基盤研究(C)	2017年4月	2020年3月	代表
42	織田涼	外生的ヒントと内生的活動が洞察問題解決に及ぼす逆説的影響とその認知基盤	若手研究(B)	2017年4月	2020年3月	代表
43	立岩真也	病者障害者運動史研究—生の現在までを辿り未来を構想する	基盤研究(B)	2017年4月	2020年3月	代表
44	堀江未来	国際教育プログラムの開発・普及・評価サイクルの構築:高大連携による学びの実質化	基盤研究 (B)	2017年4月	2020年3月	代表
45	岡本尚子	視線と脳活動の同時計測による思考過程と思考負荷の可視化	若手研究 (A)	2017年4月	2021年3月	代表
46	藤本学	不定就労者の就労自立支援に向けたPBL型ソーシャルスキルトレーニングの開発と普及	基盤研究(C)	2017年4月	2021年3月	代表

8. 競争的資金等(科研費を除く)						
No.	氏名	研究課題	資金制度・研究費名	採択年月	終了年月	役割
1	安田裕子	多専門連携による司法面接の実施を促進する研修プログラムの開発と実装	JST/TRISTEX 戦略的創造研究推進事業	2015年11月	2020年3月	分担
2	早川岳人	社会的要因を含む生活習慣病リスク要因の解明を目指した国民代表集団の大規模コホート研究: NIPPON DATA80/90/2010	厚生労働省 厚生労働行政推進調査事業費	2016年4月	2017年3月	分担
3	中村正	多様化する嗜癪・嗜虐行動からの回復を支援するネットワークの構築	国立研究開発法人科学技術振興機構 社会技術研究開発センター 戦略的創造研究推進事業	2016年10月	2020年3月	分担
4	安田裕子	「司法面接と心理臨床の連携」	国立研究開発法人科学技術振興機構 受託研究	2015年11月	2018年3月	代表
5	若林宏輔	司法取引に基づく有罪獲得メカニズムをめぐる法学・心理学による日米国際比較協	二十一世紀文化学術財団 学術奨励金	2016年4月	2017年3月	代表

		同研究					
--	--	-----	--	--	--	--	--

(9). 知的財産権								
No.	氏名	名称	出願人 区分	発明人 区分	出願番号	公開番号	登録（特許）番号	国
該当無し								